

016.2  
Mi 887

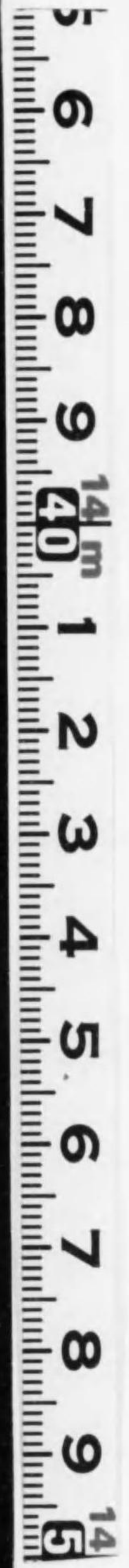
016.2-Mi 887



1200500723582

上原元帥と郷土史

前田厚著



始





館報

(昭和九年六月)

上原元帥と郷土史

(前田 厚 著)

目次

- 一、はしがき
- 二、上原元帥と郷土史
- 三、閲覧案内
- 四、圖書種別
- 五、閲覧人員並冊數
- 六、巡回文庫
- 七、閲覧傾向
- 八、閲覧者累年表

宮崎縣立都城圖書館

(電話二三九番)



016.2  
MI. 887



前田 厚 著

上原元帥と郷土史

名郷土史に關する上原元帥の遺言







LIBRARY  
UNIVERSITY OF TORONTO

UNIVERSITY OF TORONTO  
LIBRARY

UNIVERSITY OF TORONTO  
LIBRARY

UNIVERSITY OF TORONTO  
LIBRARY

UNIVERSITY OF TORONTO  
LIBRARY



27A-2/5

はしがき

館長 富松嘉吉

前田厚著上原元帥と郷土史を紹介致します。

「一休この郷土史の精神は何だと思ひちよいや、これは愛郷心の養成ちやつど、烏でも自分の古巢に歸らんとすつどが、殊におんちよ烏やばゝ烏になれば猶更ぢや、人間もおんちよになれば生れ故郷に戻りたくなるからなア、之が愛郷心ぢや、この愛郷心が即ち愛國心の本ぢや、愛郷心がない奴には愛國心はないからなア、それで唯昔の事を書き並べてもこの精神が籠つて居らなければ何の役にも立たぬ」上原閣下はこう仰つしやつてゐます。郷土の調査研究は實にこゝに根底を置かねば嘘でありませぬ、こゝに眼目を置かねば徒に物好き道樂に終り、或は偏倚なる人間を作ることになりませう。本篇は前田氏が市誌編纂上故上原元帥から直接に又は書簡を以て指導を受けられた誠に貴重な當地方の記録であります、これを館報に織り込み社會公衆の利用がなければ無用の長物であります。現在生徒兒童の多

圖書館は公會堂の様なもので社會公衆の利用がなければ無用の長物であります。併し大人や婦人の登館者が少く實際的に日常生活に利用せられぬ事は誠に遺憾に思ひます、設備狹隘で且不完全であることは申澤ありませんが幸に館外貸出の便法がありますからドシ／＼御利用下さる様御奨め致します、購入圖書の選擇良書の提供には常に苦心致して居りますから御心付の點は御遠慮なく御要求を望みます。斯くして圖書館の機能が充分に發揮せられることを祈つて居ります。

昭和九年六月四日



## 圖書閱覽案内

- 一、閱覽ハ館内外共無料デス
- 一、館内閱覽者ハ備付ノ閱覽票ニ指定ノ事項ヲ記入シ圖書ノ交付ヲ受クルノデス
- 一、館外貸出ニハ圖書携出特許證ヲ受ケネバナリマセス
- 一、特許證交付ノ手續ハ左ノ通りデアリマス
- 1、係員カラ備付ノ特許證交付願用紙ヲ貰ツテ手續ヲスルノデス
- 2、特許證交付願ニハ市内ニ居住スル丁年以上ノ方ノ保證ヲ要シマス  
但シ學生生徒ハ其校ノ受持先生又ハ主任ノ保證ヲ要シマス
- 一、巡回文庫ハ官衙學校及諸團體ヨリ申込ニ依リ送付シマス

但シ管理者ノ記名捺印ヲ要ス

尙ホ運賃ハ申込者ノ負擔デスガ男女青年團ニ限り半額ヲ館デ負擔シマス

### 定期休館日

- 一、一月一日ヨリ全五日マデ
- 一、四大祝日
- 一、毎月一日十五日
- 一、曝書(十月頃十日以内)
- 一、十二月廿八日ヨリ全卅一日マデ

### 開館時間

- 一、夏季午前八時ヨリ午後九時マデ
- 一、冬季午前九時ヨリ午後九時マデ

## 序

此の書は前田氏が故上原元帥と直接面接し膝を交へて長時間問答せられたるそのまゝの記録と元帥と前田氏と書簡を以て互に研究し質問應答せられたる元帥の書簡をそのまゝ序を追ふて掲載し、之が前後の事情をも詳述せられたものである。

即ち故上原元帥を全然郷土史の研究といふ立場より眺めたものであつて、前田氏ならではの天下此の珍貴の著書を成すことは出来ない。余は本年に入て初めて一夜家居し本書を通讀して殆ど元帥と坐にあり、その巧妙にして洒脱なるお話振と或は厲聲疾呼注意を喚起し、或は囁んで含める様に諄々と且つ説き且つ教へて時の過ぐるを忘れ給ひしゝありし目を目のあたり繰返すやうで、感興は盡きない。前田氏の筆、元帥の口吻を寫し得て妙を極め、卷を蔽ふ能はさらしめる。元帥が陸軍の最高首座にあつて此の方面のことすら、大變なことであらうに、高齢日に病弱を加へ來る間にも、故山を思はるゝ熱情と史實討究の求知心とは、多忙重病を押して、一々質疑に親ら筆を把つて縦横無盡に意見を吐露し示唆教導せられし赤心の結晶、悉く此の一卷にあつ。讀來り讀去りて、慨然として感嘆之を久しうし涙如頬に垂るゝを覺ゆる。

あゝ世に斯くも深切にして熱誠なる、而かも史眼透徹、知見該博、想像推理力の豊富なる大先輩いづくにあらうか。



読んで巻末に至り、トンビ丘の大研究今漸く其緒に就かんとして溘焉薨去せられ、郷土史の一大秘庫空しく開かれず、永遠の沈黙に歸することなきか。若しくは元帥のヒントにより模索探究近く驚く可きの秘史白日の下に全貌を現し來るであらうか。

元帥固より文を以て居るの人ではなかつたが然し言々句々真情の流露であり、一語その不用意の文の、金聲玉振、かの文豪等の推敲彫琢せるのそれに比して更に力あるを覺ゆ。

猶元帥の縦横の談論を読みもて行けば苦笑微笑に次々に覺へず爆笑せしむるあり、沈思黙考、往年の活ける史實綿々として胸奥に湧き來るものあり、その千變萬化 端睨す可らざるの語材應接に追なからしむ。

余壽昔海舟の「氷川清話」なるものを愛讀し、今も如是の清談卓論他に類なしと思ふが、本書を讀むに至つて、其の材の身邊の史實であり、其興趣の富瞻 遙かに之に過ぐを覺ゆ。

本書はまさに吾人畢世の好伴侶であり元帥の不磨の大人格は本書を通じて赫々として郷土人の肺腑を照映するであらう。

昭和九年二月二日

川越實誌

目録

第一章 上原元帥と郷土史……………	一
第二章 都城史研究資料並に庄内古跡由來記に對して下された御禮狀……………	三
第三章 住吉山研究物並に十勝地に對して下された御禮狀……………	六
第四章 梅北出土品其他に關する御書簡……………	九
第五章 出土品を差上げたのに對して下された御禮狀……………	三
第六章 古寫眞に添へ御返信……………	一四
第七章 水間旅館に於ける御談話……………	一六
第八章 御返事遷延の御報知……………	三
第九章 御談話要領筆記を御返し下された時の御書簡……………	三五
第十章 土器破片入木箱を差上げた時に下された御返事……………	三九
第十一章 有村治左衛門の遺跡に關聯して下された御書簡……………	四二



第十二章 八田翁に關して差上げた書面に對する御返事……………四

第十三章 古文書展覽會目錄及び足蹟保存碑建設地記入の地圖等を差上げた時下された御返事……………四六

第十四章 上村の古塚の取扱につき問合せた時の御返事……………五〇

第十五章 九州市長並に市會議長會議を都城に開いた時のパンフレット其他を差上げたのに對する御返事……………五三

第十六章 病氣御見舞に對する御返事……………五五

第十七章 上原元帥訪問記(其一)……………五七

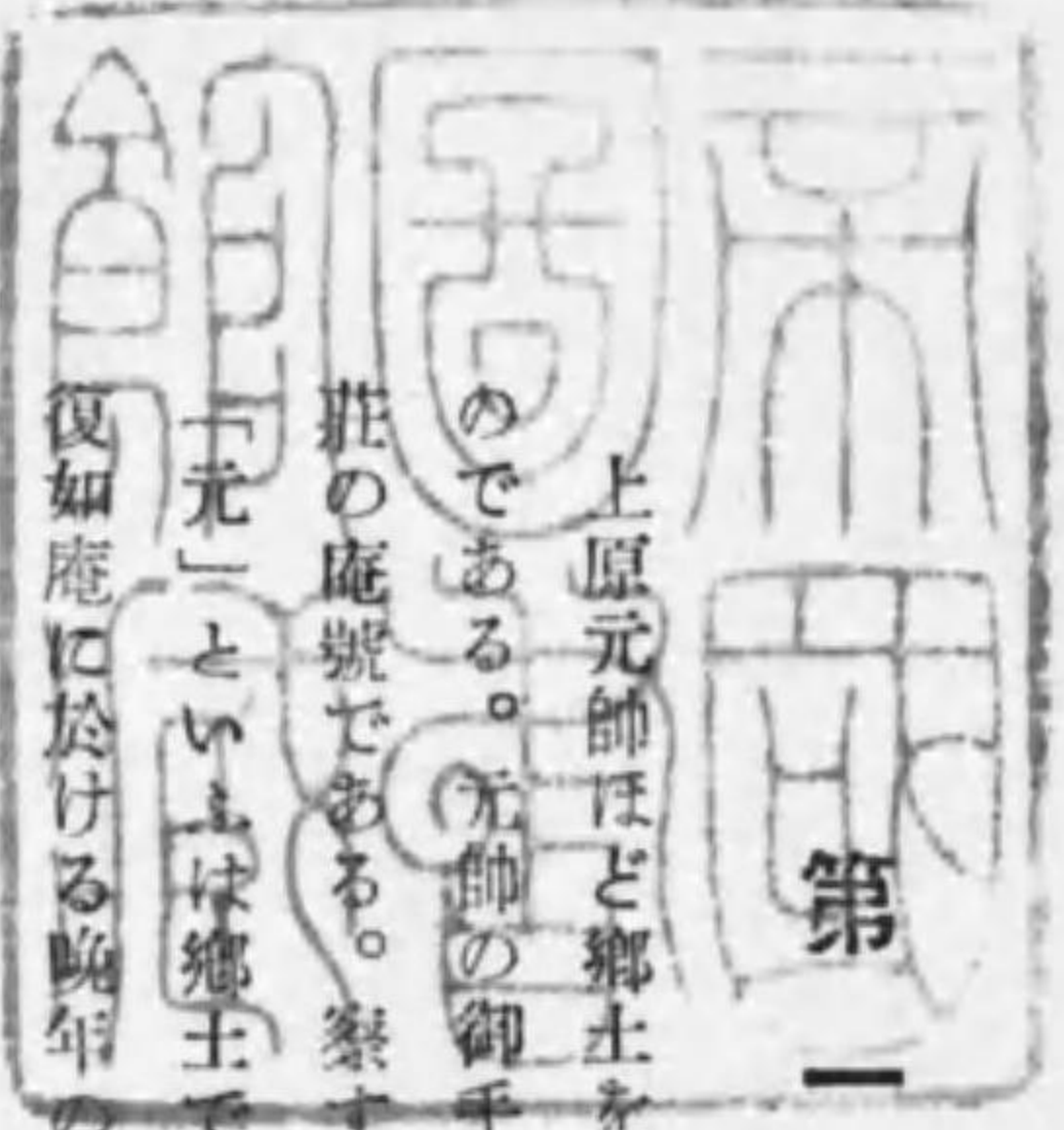
第十八章 上原元帥訪問記(其二)……………六一

第十九章 大岩田城調査報告に對する御返事……………六二

第二十章 元帥最後の關心事の一なるトンビ岡附近の研究……………六六

第二十一章 結 言……………七〇

第一章 上原元帥と郷土史



上原元帥ほど郷土を熱愛した人は他にあるまい。この熱愛が元帥を驅つて郷土史に熱心ならしめたのである。元帥の御手紙の封筒には復如庵と書いてあるのが多いが、之は千葉縣一之宮海岸にある別荘の庵號である。察するに此の庵號たるや「元」に復する「意味を含んで居るのであらう。そして其の「元」といふは郷土であり、又郷土に於けるありし日の生活である。之を再現し、之を味はれるのが復如庵に於ける晩年のお楽しみであつたであらう。従つて其の建築の如きも昔から都城附近にあつたやうな茅葺であつて、亭桶や糸車さては足なかといふ一種の蘆草履までも配置されてあつたと聞いて居るが、元帥が眠られぬ静夜この風物の中に坐られ、郷里からの手紙や新聞などに見入られて全く郷土の人となつてしまはれて居る有様が思ひ浮べられるのである。勿論、元帥は國家の元帥として常に國事に心を注がれ、殊に近頃非常時として甚しく憂慮して居られたのであつて、以上述べたやうな事は、元帥の私生活の一部に過ぎないのである。しかも元帥は此の郷土氣分に浸りつゝも光輝ある郷土の歴史を追想し、此の間に綺羅星の如く輝いて居る幾多の人物に接し、如何にして之を世に現はし、かくの如き人物を將來に生み出さんかと焦慮して居られたのである。かくの如く考へて來ると、元帥の趣味の私生活も亦其の愛國心の一面である事が分るのである。



本年六月、私が元帥邸に向つた時の話の中に、次のやうな事を語られた。

「一休この郷土史の精神は何だと思ふか。之は愛郷心の養成ぢや。鳥でも自分の古巢に歸らうとするぢやないか。殊におんぢよ鳥やばい鳥になれば猶更ぢや。人間もおんぢよ（年寄）になれば生れ故郷に戻りたくなるからなア。之が愛郷心ぢや。この愛郷心が即ち愛國心の本ぢや。愛郷心のない奴には愛國心はないからなア。それで唯昔の事を書き並べても此の精神が籠つて居らなければ、何の役にも立たぬ」

之によつて元帥が郷土史に熱心であられた所以が分るのである。元帥に取つては愛郷心即愛國心である。愛郷心と愛國心とは渾然として融和し一休をなして居ると言つた方がよからう。昔島津久靜公が北郷平太左衛門以下三百の將卒を率ゐて京師に上り輩下を警備し奉られた時のやうな意氣を現在の郷里に喚起したのであられたであらう。元帥の御兄資峻氏が郷土の子弟を引きつれて上京され、彼等の成功を我が事の如く楽しんで居られた其の氣持を今の都城に喚起したのであられたに違ひない。かやうな意氣、かやうな氣持の中に愛郷心と愛國心とは溶け込んで居るのである。

私は身不肖にして郷土史の編纂に當つて居る關係から元帥の知遇を忝うする事が出来た事を此上なく光榮に思つて居るのであるが、殊に元帥から御書面を戴く事が十七回、御話を承はる事が前後三回であつて時間にして約二十時間に及んで居るのみならず、その御書面並に御話が殆んど郷土史に關係して居るといふ事を衷心より感謝して居るのである。

今や元帥逝かれて既に御言葉に接する事が出来なくなつた。深夜机に向つて御書面に見入り、御話の筆記を繕けば、元帥の慈顔あり／＼と眼前に浮び、感激の涙、滂沱たるを禁ずる事が出来ない。今元帥の御書面や御話を味へば味ふほど慈愛溢るゝ御教が身にしみて感じられるので、之を私するに忍びず、冊子として出版する事にしたのである。元帥が郷土史に對して如何ばかり造詣深くあらせられたかは、以下章の進むにつれて判然して来るであらう。

## 第二章 都城史研究資料並に庄内古跡

### 由來記に對する御禮狀

私は昭和四年四月から郷土史編纂にたづさはる事になつたのであるが、其年の六月に近所の財部實正氏から庄内古跡由來記といふ古い漢文で書いた寫本を貸して戴いたので、大に喜んで、早速これ一口語體に書きかへ、之に其後の變化と現狀とを書き加へて、新體庄内古跡由來記と名づけ、翌五年一月十日に騰寫版で出版したのである。是と同時に都城史研究資料といふのを同じく騰寫版で出版したのであるが、之は昭和四年十一月二十四日より三十日まで縣立都城圖書館で開いた古文書展覽會の出品中より撰擇して更に數種を加へ、簡單に説明を施したものである。

さて出版の翌月二月の中頃、此の二冊を圖書館よりの荷物の中に入れて都城市郷土研究會の名を以



て上原元帥に差上げたのであつた。郷土研究会といふは私が郷土史編纂に取りかゝると直に企てた會である。すると三月の初になつて元帥邸の執事木村春吉氏から名刺に次の通り認めて封筒に入れ封筒の上にも次の如く認めて送つて來た。封筒には東京中央五年三月三日の消印があつた。之が元帥邸から始めて頂いた書面である。

過日ハ貴書正ニ受領仕候。主人ハ御喜びにて拜讀致居候。宜敷御禮申様仰せつかり候

子爵上原家執事 木 村 春 吉

(封筒)

宮崎縣郡城市

郷土史談會

事務員御中

そして幾日かの後、今度は元帥直筆の禮狀が來た。之は高島秋帆先生紀功碑の繪端書の裏に極めて調和よく認めてあつて、品川局五年三月八日の消印がある。之が元帥から頂いた最初の書簡である。

(本文)

一都城史研究資料

一庄内古跡來由記

右御惠投被下芳情多謝仕候。一氣ニ卒讀、萬感胸ヲ衝キ徐ロニ望郷之念ニ打レ申候

三月八日

(宛書)

宮崎縣

郡城市

郷土研究会御中

東京市外大井町

上原勇作

察するに都城よりの荷物が着いた時、元帥は直に執事に命じて夫々禮狀を出させなされたのであらう。それから一讀せられて後、御自分で筆を執られて再び禮狀を下されたのであらう。この一事を以ても如何に元帥が厳格な行届いた御方であつたかといふ事が分るであらう。

今この本文を味つて見るに、語句は簡潔であるけれども、如何に元帥が郷土を愛して居られたかを十分に物語つて居るのである。一體、この冊子たるや、私が拙い字で書いた謄寫版すりである。かやうな物にまで感謝して頂くだけでも恐縮に堪えないのであるが、之が郷土の史蹟に就て色々と書いたものであるから、元帥には特別に興味深く御感じになつたのであらう。「一氣に卒讀」といふ言葉がよく元帥の御氣持を示して居る。御手に取られると、何もかも忘れて御讀み下された事であらう。「萬感胸を衝き徐に望郷の徐に打たれ申候」に至つては、老元帥が巻を胸に藤椅子深く御体を埋めら



れて眼を御つぶりになつて居られる御姿が眼前に髣髴として現はれるのを覚えるのである。

### 第三章 住吉山研究物並に都城十勝地に對する御禮狀

頃は昭和四年の夏であつた。圖書館の河野・北郷兩氏と共に、徳・住吉附近の史蹟調査を試みて、其報告を十餘回に亘つて三州紙上に發表した。其中に、

「住吉山の頂上にある姥ケ石といふは、竈のやうな形をして居る。多分、大昔姥でも住んで火を焚いて居た所でもあらう」

と出鱈目を書いて置いた。然るに、それが元帥の御目に止まつて、其後山田悌一君が歸郷の時

「昔、竈のやうな祭壇を造つた頃がある。或は、それかも知れないから、委しく調べて寫眞でも取つて送るやうに」

といふ傳言があつたのである。そこで早速その事に取りかゝらうと思つて居ると、末吉の垣内清二氏より「近日中島井博士が来て住吉山を發掘する筈だ」といふ通知があつたので、之を待つ事にしたのである。そして翌年の三月八日に博士の發掘があつて、立派な先史時代の遺跡たる事が證せられたのである。私は直に其の結果を三州紙上に發表すると共に、寫眞や姥ケ石の材料となつて居る附近の岩

片等を取纏めて置いて、五月頃、大山市長の上京に當つて元帥に差上げて頂いたのである。

又、その市長上京の直前に「都城十勝地」といふ小冊子を謄寫すりで作つたので、之も此便に托して元帥に差上げて頂いた。

かくて六月の初に元帥から直筆の禮狀が來た。そして色々郷土史研究や史蹟保存等に關して御注意を與へて下された。これが二度目に元帥から戴いた書簡である。

(本文)

尙々

上原ハ北ハ北海道ハ南ハ臺灣ニ亘リ幾多ノ石碑ノ彫刻文ヲ見候ガ其文字ノ銷滅シテ讀ム可ラサルニ至ルハ僅ノ歲月ニテ足ルモノト存居候。就テハ龍峰寺ノ義烈塔ヲ始メ、重野先生撰文之忠魂碑ヤ各墓地ニアル前賢諸先生之石碑文等ハ、今ノ中ニ拓本ニシテ置クコト必要事件ト存シ候。

此事ハ前市長トハ度々話合候事ニ御座候。婆心申上候

御健祥奉賀候。大山君上京之折「十勝地」御惠與被下、其後六月九日付御手紙ヲ以テ右之訂正事項御知被下、多謝仕候。先日ハ大保君懇々當庵迄來訪相成、御近狀緩々と承候。山田悌一君歸京後承候へハ史料も中々集リ兼子候由、案外ニ存候。曾我、津曲(豊廣)、林、速見、妹尾等之諸家ニハ島津家時代之モノハ随分ト可有之哉ニ存居候。散失致シタルニヤ。心許無ク存候。城之前ニ住居之北郷家ニハ?ニ候ヤラン。郡部ヤ町家ニハ如何ニ候哉?住吉山頂之石ニ就キ調査之結果、



大山氏便方御送り被下、面白ク存シ候。都城平地之周圍ニ在テハ、石峯(母智丘)、コウノ峰、金御嶽、屯兵丘、六ヶ城、少シ遠ヒガ天ヶ峰(今ハ松ニ掩ハレテ居ルガ大ナル人工ヲ加ヘアリシヤニ記憶ス氏久公ノ時ニ丁事ヲ爲シタル歟或ハズツト其前ヨリ之レアリシニ哉)等等ハ、地方文化之進展ニ關係有之モノニハ無之哉トノ意味ヲ以テ研究調査シタランニハ、住吉山姥ヶ石同様之獲物アルカモ知レヌト存シ候事ハ、大保氏トモ話合候付、御聞取ニモ候半ト存シ候。都城市誌ト云ヘバ多年、政治、經濟ハ勿論、言語風俗ヲ同シ、共存共榮シタル四周之地理、歴史ニモ及ヒ候筈ニ付、右之次第ニ御座候。末吉カ財部ノ方面ニ雄兒石ト云フ神様カ何カ祭ラレ、陽春之候、馬之參詣スル所有之候ガ、今日ハ如何ニ相成居候哉。オゴイシト神籬石トハ何等干係無之候哉ト空想致シ候間、乍序申上候。地方文化之中心ガ梅北地方ニアリシ頃(平安朝)カラ、島津(戸歟)莊地方ニ移リシ鎌倉時代迄ノ歴史ハ面白カラント存シ候。何等文献御發見無之候哉。金ガ無ヒ事故碑石ヲ建テルトハ參リ申聞敷ケレド、史蹟調査ハ着々進捗致シ候筈ト喜居候

以上御禮旁艸々筆ニ任セ如此御座候 謹言

六月一日

前田様

(封筒裏)

上原拜

千葉縣一之宮町海岸

復如庵生

呈

(封筒表)

宮都市

崎市役所(氣付)

縣前田厚様

御禮

(消印—千葉一宮五年六月二日)

### 第四章 梅北村出土品其他に關する御書簡

それは昭和五年七月初の或日曜の午后だつた。例によつて七つ道具を携へ安久街道南方の双子塚附近を調査して居ると、梅北小學校の愛甲校長が通りかゝつて「何をして居る」といふ事だつたので、出土品の蒐集をして居る旨を述べて、序に梅北の生徒に集めさせて貰ふやうに頼んだのであつた。すると翌々日の火曜に愛甲校長から電話で多くの出土品があつた事を知らせて來たので、其翌日の水曜



日に直に出張して、夥しい石器と土器片が三箇の大きな箱に充滿して居るのに驚いた。校長の話によると、一月曜に生徒に話したのであるが翌日は此の通り集つて来た」との事である。そこで早速その現場二三箇所を調査して歸り、之を三州紙其他の新聞に發表した。之が元帥の御目にふれて次の御手紙を下されたのである。之は直筆である。

(本文)

尙々

亂文亂筆御推讀希上候。

妹尾、大山、山下諸彦ニ宜敷御傳聲希上候。又タ劣生健在眠食平安ト御申加ヘ希上度御座候。炎暑嚴敷候得共、益々御清健珍重ニ奉存候。近着之新聞ニ梅北ニテ土器石器等多量發掘云云ト相見得御檢討相成候趣、追々ト御奮闘ニテ種々ト郷土史實モ現ハレ來リ候事、欣快ニ奉存候。仍テ此等之保護保存方緊要ト存シ候ガ、先度申上候墓北地方之文化之研究トシテ、今度ノ發見ハ大ナル資料ト遠察仕候。之ニ就テ思ヒ起シ候ハ梅北ノ「シユク村」ノ事ニ候。幼年時代(十歳乃至十三歳頃)兎狩等ニ熱中時代之事故、記憶正シク無之候得共、志布志ニ(或ハ斧研ニ)通ズル道路上ニ、右「シユク村」ハ有之、コレハ守戸或ハ守口ニ可有之、墓守トシテ、高家大族之墳墓之附近ニ住居セル者ノ子孫部落ト被存候間、多分、右村之附近ニハ古墳等存在ハ疑ヒ無之、恰カモ早水(モトハ温水トカ冷水トカ云ヒタリ)之古墳近クニ同シク「シユク村」アリタリ。タシカモト

ノ高木原(川東ノ北ノ)ニモ「シユク村」ハアツタ様ニ記憶致シ居候。豪族(平安朝以前)之墳墓ニ緣故アルモノモ亦タ無キモノモ可有之歟ナレト、一ノ手掛リニハ可相成存シ、余事ナガラ申上候。「オンチヨドン議ヲ吹キヤルナ、ソシナ事ハ遠ノ昔カラ分ツチヨツド」ト御叱リ可相成トモ存シ候。御案内通ニ、近畿地方ニハ夥敷此種之部落散在シ、大正二、三年ニ亘リ大阪ニテ大患ニ罹リ西之宮市之西端夙川畔ニ住居致居候ガ、山陽道ヲ開シテ北ニ守具村ト云フ部落アリ、武内宿禰トカノ墳墓所在地ト聞キ居候。モトハ「シユク村」ト云ヒ、シユク川ト云ヒタランモ、其名之醜ナルヨリ、夙ノ字、守具ノ字ヲ用ヒ、續ヒテ守具ト相成リ、僅カ十年ソコノニテ、今日デハ森具村ト守ヲ森ニ變ヘ居候。可笑モ候得共、苦心慘怛之人情亦タ諒トスペント存候。守戸カ守口歟、又タイツレ文献ニハ明記サレアルベキも、下ノ時代カラノ名稱ニヤ、更ニ存シ不申候。シユク村ト云フハ近畿ニテモ唱ヘラレ候モノニテ、御參考トシテ此一條申添候 以上

七月十五日夜

一之宮海岸

上原拜

前田様

(封筒裏)

千葉縣一之宮町海岸



復如庵主  
敬白

(封筒表)

宮 都 城 市  
崎 市 役 所 (氣付)  
縣 郷 土 史 取 調 掛

前 田 君 机下

(消印—千葉、一宮五年七月十六日)

### 第五章 出土品を差上げたるに對して 下されたる御禮狀

昭和五年七月に梅北方面の出土品が手に入つたので、他の方面の出土品と共に元帥に差上げやうと思つて居ると、八月になつて財部泉氏が東京から歸られたので、早速依託する事にした。財部氏も快く引受けて下された。又別に寫眞一枚を依託したが、之に就ては次章に詳記する。すると、九月初に小林副官より元帥に代つて禮狀が來た。即ち次の通りである。

(本文)

謹啓

愈々御清榮の段奉慶賀候。陳者財部主計正殿に御依託相なりし元帥閣下宛の御寫眞一葉考古學資料の標本箱壹個は確に御受納相なり申候。御芳情に對し厚く御禮申上ぐるやう閣下より申つかり候につき謹んで御傳達申上候。

尙閣下には御寫眞は暫く拜借致したく申しおられ、又標本は獲難き資料なれば將來研究致すやう申しおられ候間、申添候。先は不取敢御禮迄如斯御座候 敬具

八月卅一日

元帥副官 小 林 一 男

前 田 厚 殿

(封筒裏)

東京參謀本部

元帥副官 小 林 一 男

(封筒表)

宮崎縣都城市役所氣付

前 田 厚 殿



## 第六章 古寫眞に添へて御返信

之も昭和五年七月頃、新馬場の長倉家にある古い寫眞が手に入つた。それは戊辰の役に淀川堤に於て戦死した肥田景直氏の夫人が父君景正氏と共に墓參の爲に京都に上られた時の寫眞である。寫眞は京都の旅館で撮られたらしい。向つて左より、夫人、旅館の女中、有馬九十九氏、一青年、旅館の女中、旅館の主人といふ順になつて居り、夫人の膝に景直氏の令嬢即ち今の有田正盛氏夫人が腰かけて居られる。景直氏夫人は松元の有馬氏で九十九氏の姉さんに當るので同席して居られたのは當然であるが、一青年が誰であるか分らない。髪は總髪で袴をつけず羽織を着て刀を杖につき、横向に腰かけて顔をかくして居るので誰であるか分らないのである。景直氏夫人は後に長倉家に再嫁され今は世に居られないが、「之は勇作さんだ」と話して居られたといふ事で、上原元帥の青年時代の寫眞ではあるまいかといふ事になつた。そこで直接に元帥にお尋ねするのが正確だといふ事になり、八月、財部泉氏が歸郷せられたのを好機として元帥にたづねて頂くやうに頼んだのであつた。そして八月卅一日付元帥副官よりの書簡には「寫眞は暫く預つておく」と申されると書いてあつたが、十月の初に寫眞が返送して來て、元帥直筆の簡単な説明が添附してあつた。之によると其の青年は元帥ではなくて、高野安恒先生の實弟耕吉氏であつた。即ち一ヶ月の間、元帥は此の寫眞の事を忘れずに責任を以て調

査して下されたのであつて、元帥の嚴にして温かい御性格の一面が偲ばれるのである。

(本文)

啓

先度御問合之寫眞中之人物ハ高野耕吉君(安恒先生之實弟)之山、確カナル筋ヲ承リ候

(封筒裏)

千葉縣一之宮町海岸

復 如 庵 主

敬 白

(封筒表)

宮 都 城 市

崎 市 役 所 (氣付)

縣 前 田

厚 様

寫 眞 在 中

(消印)——千葉一宮五年九月三十日



## 第七章 水間旅館に於ける御談話

上原元帥が最後に歸郷せられたのは昭和五年十月であつて、十九、廿、廿一の三日間水間旅館に滞在せられたのである。此の中で、廿日を以て特に郷土史に關して御話をして下さる事に最初から豫定して居られたといふ事は、如何に元帥が郷土史に深い關心を持つて居て下されたかを窺ふ事が出来て、たとへば感謝の外はないのである。この日、午後一時から土持幸平・川越實兩氏のお供をして旅館に向ふと、直に小林副官が元帥の室に案内して下された。そして縁側で椅子に腰かけて色々と郷土史に關して御話を承はり、其の要領を筆記した。其間に色々の有志方が訪問したやうであつたが、皆玄關迄で歸らせて熱心に御話を續けられたのであつた。たとへば宮崎から態々見えた宮崎縣知事有吉實氏にだけ面會されたのであつた。午後五時頃 別室で夕飯をいたゞいたが、食後引續き御話があつて、十時過ぎる頃漸く御暇したのであつた。次に掲ぐるは其時の談話の要領である。先づ話は川越氏が編せられた元帥母堂略傳の批評から始まり、後、一般的の郷土史に及ぶのである。

## 御話の要領

(文中の頁數及び行數は母堂略傳の頁數である。なくとも分るのであるが比較する人のために入れて置くことにする)

○大衆に氣に入るが如く、新聞に書き載せるが如く、之を記載して置くならば、人の傳記・逸話等は

其本色を失するやうな事はあるまいか。凡て、かやうな事は、其の出所を明かにして置く必要がある。此事は新聞には必要はないが、念を入れるべき事である。

○材料即ち資料は其保存が大切である。

○二頁三行目に母の父は休道と書いてあるが、休道は隱居名であつて、本名は昌張である。

○母堂の受けられた教育。(三頁三行目以下)

母は、こんな事を言つた事がある。

「父は、むごい事をされたので、眞實の父であらうかと疑つた事もある。冬の朝、霜のかゝつて居る筈で庭の掃除をさせた事もある」

加藤純吾が聞いて、

「之を男子にあてはめて見ると、霜のふりかゝつて居る槍をすぐかせるやうな教育法である」

と附加して居たやうである。昔は槍はどんな家でも持つ事が出来たのではない。それには格があつた。其家では冬の夜などに槍を外に出して置いて、朝になると霜のかゝつた槍をすぐかせ、一方では手を槍になれさせると同時に、心を練つたものである。又、槍のない家では立木を打つたものである。道具をつけて竹刀で打ち合ふやうな撃劍は此の邊では近頃始まつたもので、それまでは主として立木で鍛練したものである。

○母堂の趣味。(三頁七行以下)



母の父は母に文字を教へなかつた。けれども義太夫の三味線と語る事を自分で教へ込んだ。この點は教育家の考ふべき所だらう。女などに文字でも教へたら、とんでもないものを書いたりして善くないとも思つたのだらう。そして義太夫のよい所で以て情操の教育をしたのであらう。母は文字は知らなかつたけれども、記憶力が強くて、何とかいふ角力取りの出て来る義太夫など、始から終まで、すつかり語つて聞かせる事もあつた。

○母の趣味は音曲であつたから、好んで芝居を見に行つた。けれども都城領内では芝居が禁じてあつたので、勝岡や財部まで出かけて行つた。俺も母に負はれて勝岡や財部に行つた事を覚えて居る。財部で二葉軍記などがあつた事なども覚えて居る。

○勝岡に早馬踊といふのがあるからといふので招待されて、母は俺を下男に負はせて伴れて行つた事がある。ところが踊手の連中が、みだらな作り物などを腰にさげて居るのを見て、母は大に怒り、招待した者をサン／＼に叱りつけて、其まゝ引きかへし、早水の池あたりで辨當を食べて、歸つた事がある。

○後に、厳格な父が何故母に芝居見物を許したかを問ふたところが、父はかやうに答へた。

「女は外に趣味のないものだから、藝事でも見たり聞いたりしなければつまらぬものだらうから、決して禁じたことはなかつた。そして之まで色々苦勞して來たからね」

○安山松巖翁の嫁選び。(四頁二行目以下)

祖父の嫁選びが人物本位であつた事は、單に次男の資弦にさうであつたばかりでなく、長男の隆左衛門親衆の嫁も東の堤家から貰つて居る。八行目の十七歳は十六歳の誤で母は十六歳で來たのである。

○家格の話。(四頁十二行)

「家老格」とあるは「家老になり得る家格」である。昔は各一門並に川上家が家老格であつて、龍岡・津曲・土持・本田・小杉・安山は家老になり得る家格であつた。

又こゝに「父資弦は安山松巖の長子」とあるが次子の誤である。

○安山松巖翁の話。(五頁五行以下)

祖父は隆左衛門親衆で松巖は隠居名である。川上家の二男であつて、一家を立て安山と稱し(川上家の次男は安山と稱する慣例なりし。恰も北郷家の二男が一家を立つれば龍岡と稱したるが如し)島津家の家政を整理した。

○祖父は二十歳の時、役を免ぜられ、二十四歳にして川上家より出で、志摩家に養子に入り、又出で、二十五歳で家部を立てた。久倫公の時である。若い時は大に發展したらしいが、前妻(津曲氏)が賢婦人で巧に之を隠し世間に漏れないやうにしたらしい。其死後、後妻は高松家から來た。之が父の母である。

祖父は久倫公の時復職して御近習役となり、御目附となり、家政の整理を始めたが、意見あはずし



て退き、久倫公時代には出でず。久倫公隠居し、久統公後を承けらるゝや、その信任を受け、間もなく上京し、上方地方の調査をした。其時には、町人其他各方面より適した人物を従へて二ヶ月を費やして調査を了へて歸つた。其中に自肯院死去され、久倫公も死なれると、直に役についた。けれども久統公の時代には家老にならず、五十九歳で家老となつた。面白い事は、それまで押しこめられて居た津曲氏を同日に家老にした事である。以て當時の黨争の一端を見る事が出来やう。明治十年の頃、金拾圓を縣より贈つて追賞した。

○孝行など武士に於ては當然とされて居た。それで、少しでも失敗があれば、それだけ又非難も甚しかつた。孝子節婦の表彰された者が町人百姓に多く武士階級に殆んどないのは之によるのである。法律の如きも下に嚴で上に寛であつたが、之は武士は法律の制裁を受けずとも、徳義心によつて自決すべきものとされて居たからで事實に於ては一層嚴であつたわけである。

○母の家政整理の手腕は祖父より受けたものであらう。母が嫁いで来てからでも、祖父母は同居して指導して居たので、大丈夫と思ふやうになつてから隠居を造つて別居したのである。

○父君の性格。(六頁六行)

父は平民的な人間のやうに書いてあるが、寧ろ高く持して居た。それでも関を鼻にかけるやうな事はなかつた。快活ではあつた。

○元帥の幼時投げられた肴を母堂が拾はれた話。(六頁十行以下)

上原の實話と書いて置かんといかん。(面上に捧げて)と書いてあるが「めんたしをして」と言つたつもりだ。あのまゝ書いて註でも入れたら面白いぢやないか。「めんたし」を加藤は「面足」と書いたが「目出度し」の轉訛ではあるまいか。

○昔の飯の炊き方及び食べ方。(七頁十二行以下)

粟から、いも(甘藷)の飯の炊き方や其の分配の方法など俺が加藤に書かせてやつたのとは違ふやうぢや。この通りに書いて貰ひたい。(其稿の寫したのを示されたので其粟の飯の項を讀む)加藤の書いたのには食事の時の家族の席順や分配の仕方委しく書いてあるのぢや。それを、こんなにされては意味が徹底せぬではないか。粟から、いもを平均に分配したのではない。先づ父は大切な人だから一番多く米の飯が行く。それから長男、そして一番末の俺は一番米が少く粟から、いもが多いわけだ。そして並ぶ時は俺と母とが向ひ合うて居て二人の間に釜がある。一番粟から、いもの多いに不満を持つて居るものだから、母が少し座をはずすと大急ぎで食べて釜の中の米の所を自分の碗に盛つて食べるといふやうな事をしたのであつた。けれども外の事には嚴格な母が此時だけは「こら／＼、又しやつど」位の事で深く咎められなかつたが、どんなつもりだつたか、よく分らない。

○この粟の飯の炊き方や食事の時の習慣などは立派な風俗史となるのだから省いてはいかんね。粟の飯の炊き方も他所を廻ると色々あるやうだが、鹿兒島や都城あたりの炊き方が一番うまいやうだ。昔の武士は米で貰ふものであつた。其時、糶一俵を出すと其代りに粟二俵を貰ふことが出来た。そ



れで金にするためには米を貰ひ、食ふためには粟を貰ふことが普通に行はれて居た。之は鹿兒島でも同様で、鹿兒島の士族でも粟の粥を食うて居る人が多かつた。

○元帥の幼時に於ける學才の話。(十一頁八行以下)

俺が學問好きであつた事を見出しかは母であるが、機鋒鋭く才氣あり云々といふ事は當つて居ないね。俺が八歳位の時だ。母は麻疹よけに俺をつれて安久の湯治に行つた。其時、荒川亭助が病氣療養のため入湯に来て居た。荒川が読んで居た書物の中から二三字づゝ文字を教へるとよく記憶して居るので、父が三字經を持つて来て之を荒川に教へて貰つたのが勉強の始まりであつた。けれども學問などさせては碌な事はないと思つたものか、其後百姓ばかりやらせたものである。「山に行つて下拂をし、木を伐り、之を擔いで歸り、田畑に行つて草を抜き、種子を蒔き、實を取る」といふやうな事は眞實だが、「其間、勇作が寸暇を盗んで猛烈な讀書をなし、學業夙に儕輩を抜き屢々老人をして舌を捲かせたことは今の郷間の語草になつて居る」といふ事は虚言であつて、こんな事はない。

……………こゝにて夕食……………

○母堂の母性愛。(九頁八行)

女性の母性愛は自然に發達するものだらうね。母が俺を佛門にも入れず、養子にもやらなかつたのは、今に其の心持が分らぬ。矢張り母性愛といふものだらうか。

○元帥幼時の學問。(十一頁八行以下——再出)

母は俺が學問好きだと考へて居なかつた。母は「俺に手習せよ本を讀め」とは言はなかつた。母は俺が十歳の十月に亡くなつた。母が死んでから俺の教育は兄夫婦に移つた。母は「次男坊だから」といふので將來の事を案じて居たのであるが、母が死んだ時、兄夫婦は「勇作の事は心配されぬやうに。兄夫婦が引受けて教育します」といふ意味の上書を認めて父に示した。父は之を見て感に打たれ直視する事が出来なくなり、頭を垂れて瞑目した。之より兄の教育が始まつた。翌年、木幡先生の門に入つた。先生のは峻嚴な教育で大に學問を奨励された。之から眞の勉強を始めた。そして木幡先生に認めて貰つた。之は自惚れかも知れぬが。其年、兄は長崎に行き西洋銃を買入れ、且つ洋式操練を學び、大にハイカラになつて歸つて來た。洋服を着て歸つたからね。それから「今後は洋學でなければいかん」といふので、俺の教育も其方向へ定められ、名も省吾と改めた。この名は木幡先生がつけられたやうだ。其頃、箕作省吾といふ洋學者が居たから、この人にあやかつてもりであつたやう。

○父君が安久で人を斬られた話。(十二頁四行以下)

父が安久で人を斬つた話であるが、之は加藤が書いたのとは違つて居るね。こんな風に書けば、父を始め家族が世間に顔出しも出来なくなつたやうに思はれる。親類が憤慨した事も、世間が非難した事も、俺は知らぬ。そんな事があつたかも知れぬが、俺は知らぬ。父は五十日間謹慎して居たが



それから直に復職して居る。たゞ問題になるのは、母が如何なるつもりで此話をして聞かせたかと言ふことだ。何か俺に悪い事でもあつて之をよくするために話したのか、其邊の事は今も分らぬ。若し之を教育の資料にでもする事があるなら、こんな點に氣をつけんといかんア。

○母堂が武器の手入れをされた話。(十七頁三行以下)

武器は澤山あつたのでなく、調べたのだ。昔は家格に應じて一定の武器を調べて置かねばならなかつた。一般の兵卒は兵具庫の中の武器を使用するのだが、家格の高い家では從兵などの使用する武器まで自分で調べなければならなかつた。こゝで氣をつけねばならぬ事は、家格によつて用ふる武器に制限があつた事だ。例へば槍などは兵卒は使へない。兵卒は刀だけをさして主人の荷物など持つたものである。

○母堂資峻氏の出陣を勵ます話。(十七頁八行以下)

「勤王の急先鋒」と書いてあるのは虚偽だなア。「軍装凛々しく」もをかしい。「玄關から見送りて」と一玄關まで見送りて」とは、どつちがいよけなア。あの時、父は立つて居たが、母は女だから關の所に坐つて

「小十郎どん、むでなこつ、しやんなア」と言つた。むでなこつ、ち今いふや?

○兄君資峻翁の事に就て。(二十三頁以下)

兄が人物養成に盡力するやうになつた経過に就て話して置かう。

島津さんが明治二年七月鹿兒島に行かねばならなかつたのは都城家が封土を返獻せられたからだ。當時「普天の下王土に非るなく率土の濱王民に非るなし」といふのが標語で、諸藩悉く封土を返獻した。けれども皆藩知事として之を持つて居た。それが一般の状態であつた。しかるに都城のみは封土返獻を願ひ出でると「宜しい」といふわけで直に三島地頭を持つて來た。そして四萬石の殿様が千五百石の士族となつてしまつたのだ。そこで都城側では物議が起り「名分を明かにせねばいかん」といふので鹿兒島に訴へた。舊主を地頭にしたいといふ要求である。久光公は之に同意であつた。「一休、島津家と關係深い都城家を、かくまでせんでもよいではないか」といふ意味の手紙が西郷どんの甥(妹の子)の市來といふ人の家に現存して居る。北郷伴兵衛どんは鹿兒島に出て運動して居たが駄目であつたので都城に歸つても町に宿を取り家には歸らずに其の儘島津さんに出つて鹿兒島に行つた。其時、木幡榮周、福山一二、山下半之丞、武田省介、渡邊甲介、坂元良全、山下敬二等のやうな偉い人が多く隨つて行つた。そして三島地頭が來た。三島は領内を三分して壓迫を加へた。其中でも經濟的壓迫がひどかつた。第一困つたのは薪だ。外の郷に薪取りに行つてはならぬといふのだから困つたものだ。そんなら田舎は喜んで居たかといふと矢張り不満であつた安久、梅北の者が苦役のために三股まで行くと泊らねばならぬ。それには仕事を休んだ上に費用が要る。土木は盛に起すといふのだから堪らぬ。其時の政治組織が面白い。地頭が上莊内、下莊内、



三股の三郷を總轄して居り、各郷には隊長といふのがあつて士族を率ゐて之を治め、農商工が働くといふ組織である。それで會計でも何でも其の士族の中の誰かゞ之を勤めるのである。恰も昔の希臘にでもあつたやうな状態である。こんな事で二年餘を過したが、都城縣が設置されてから、日本全体が同様の状態になるといふので、愈々士民も覺悟を決めた。乃ち資峻も人物養成を思ひ立ち、御親兵を志願し、四十餘人を率ゐて東京へと出かけた。しかるに東京でも亦鹿兒島兵のために三島流の取扱を受けた。(鹿兒島の兵も同じく東京で田舎者扱ひを受けて居たが)。そして不平を持つて歸つた者もあつたが、資峻は踏み止まつた。御親兵解散後、教導團に轉じた者も多かつた。其頃、渡邊鑑(久保田尙作)・和田周助(松山匡)・門田見陳秀・酒匂景信等が居たが兄だけ残つて外は歸つた。兄は自分一人が昇進しても何にもならんと思つて居た。自分は家老までして居たのだから今さら昇進もあつたものではないが、たゞ自分より外に人物を作りたいのであつた。それで當時の偉い人々の間に多くの知己を持つて居り、手筈があつたに拘らず、自分の榮達を計らなかつた。臺灣征伐前に兄は都城に歸省した。父が餘りに度々其の歸郷を要求したから休暇を得て歸つた。それと同時に募兵の用務もあつた。當時、鹿兒島から歩兵、都城から砲兵を出すといふ事になつて居た。そして父をつれて再び上京した。明治七年の冬、陸軍砲兵少尉に任じ、郷兵を率ゐて臺灣に行つた。その以前に父は歸したが、それから後はもう兄に歸れとは言はなくなつた。自慢するのではないが父は風姿堂々として坐作進退が立派であつたから、何處に行つても恥かしい事はなかつた。野津ど

んあたりでも、ほめて居られた。けれども江戸の者から見れば田舎者だから、或時、途上で魚屋が籠を突つかけたので、兄が鐵拳を見舞つてやつた事がある。兄は臺灣役中に中尉になつた。明治十一年頃より兄の舉動が變つて來た。失望の極、酒と狩獵に耽るやうになつた。それは自分で引率して上京して來た多くの者は、或は歸國し、或は十年の役で倒れてしまつたからである。けれども明治十四年、俺が洋行するといふ報と須田が成功したといふ知らせを聞いて兄は大に喜んだ。父の死は特に兄に打撃を與へた。

姉の上京したのも都城のために盡す一心からであつた。

○維新當時、都城人士が三つに分れた。第一は島津家について鹿兒島に行つた者、第二は都城士族の窮乏を救ふために居残つた者、第三は人材養成のために上京した者、是等の三つである。第一の島津家に隨つて行つて其の衰亡を防ぐ事に努めた者は成功したと言はねばならぬ。他の私領主の中には衰微したものもあるが、都城家のやうに今に榮えて居るのは外にないからなす。(重富などは別ぢやが)。第二の士族の窮乏を救はうとする者は失敗に終つた。それは銀行をやつたりして見たけれども、不況に襲はれて失敗した。此の失敗は都城の秩序紊亂の原因をなした。「おせんしも駄目ぢや」といふやうになつて其傾向は今でも残つて居る。第三の人物養成の爲に上京した者は先づ成功と言つてよからう。それについて行つた者の中に須田や財部や上原などが居たからなす。上原は人物ぢやないどん。



## 都城の歴史に就て

○都城の歴史を書くといふ事ぢやが何といふ書名にするつもりやうその名で大ぶん違つた物になるわけぢやな。都城市の歴史なら二三頁で済むぢやらう。(此時、ノートの表紙に書いた「都城市誌」といふ字を御目にかけて「うん／＼」と言はれて話が續く)

○先づ第一が地質學的研究ぢやな。都城中郷田圃は沼だつたに違ひない。又霧島と櫻島との噴火で何回も埋められて居るから、先づ之を研究せんといかん。誰か専門の人に頼んで研究して貰ふことぢやな。こちらから何々の事を研究して呉れと頼むとよい序のある時に夫々専門の人に調べて貰ふ事が出来る。場合によつては縣あたり頼む事が出来るわけぢやな。

○その次は考古學的研究ぢやな。之も今やつて居りやるやうぢやが、材料をやりやれば東京でも研究させてあげるからな。大山どんがよく研究して居て世界的の學者ぢや。此前の土器片なども皆大山にやつて置いた。其中に何か言つて来るだらうと思ふが、もつと大きいのを送つてほしいな。あまり小さいと分らんど。送料どま市役所に出さすればよからうぢやな。何れにしても研究の世話はいくらでもするから材料を作つて貰はう。

○その次は歴史的研究ぢやな。大和朝時代・奈良朝時代・平安朝時代・鎌倉時代・足利時代・戰國時代・豊臣時代・徳川時代・維新以後といふ順序になる。どうすいや。後代から逆に上る方法もあるな。

○大和朝時代には、どんな事があるかな。何も無えや。

○奈良朝時代には、どうかな。

○平安朝時代は、どうかな。梅北に来て開拓したのは誰かな。平季基か。神柱が出来てから何年になるかな。九百餘年か。平重盛が琴を獻じたといふ事があるが、此邊には随分平家の勢力があつたらしいな。その勢力が衰へて源氏の忠久が来たのかな。正應寺が出来たのは何時や？仁安元年か。それは、どの位前や？

○鎌倉時代になつて忠久公が来やつたな。初に堀之内御所に来やつたのだな。それから祝吉御所に移りやつたのぢや。島津驛の島津といふ名は何時頃出来たものや？あの頃の道は何處を通つて居たのぢやろかい。大王の避病舎の附近の高地が志比田の方に續いて居たと思はれるが、あの方に通つて居たのかも知れんな。或は白岸の方に行つたかも知れん。吉田東五の地名辭典を見たや？未だ見ない？そりや、いかん。直ぐ調べやい、ないなら大山どんに言うて買ふて貰やい。

○足利時代・戰國時代・豊臣時代には材料が多いな。大抵島津家に關係があるが、島津家關係以外の事をよく調査せんといかん。

○徳川時代になつて下城して新邸が出来たが、之が都城市の誕生ぢやな。

○維新後に三島地頭の時代があり、都城縣の時代があるのぢやな。

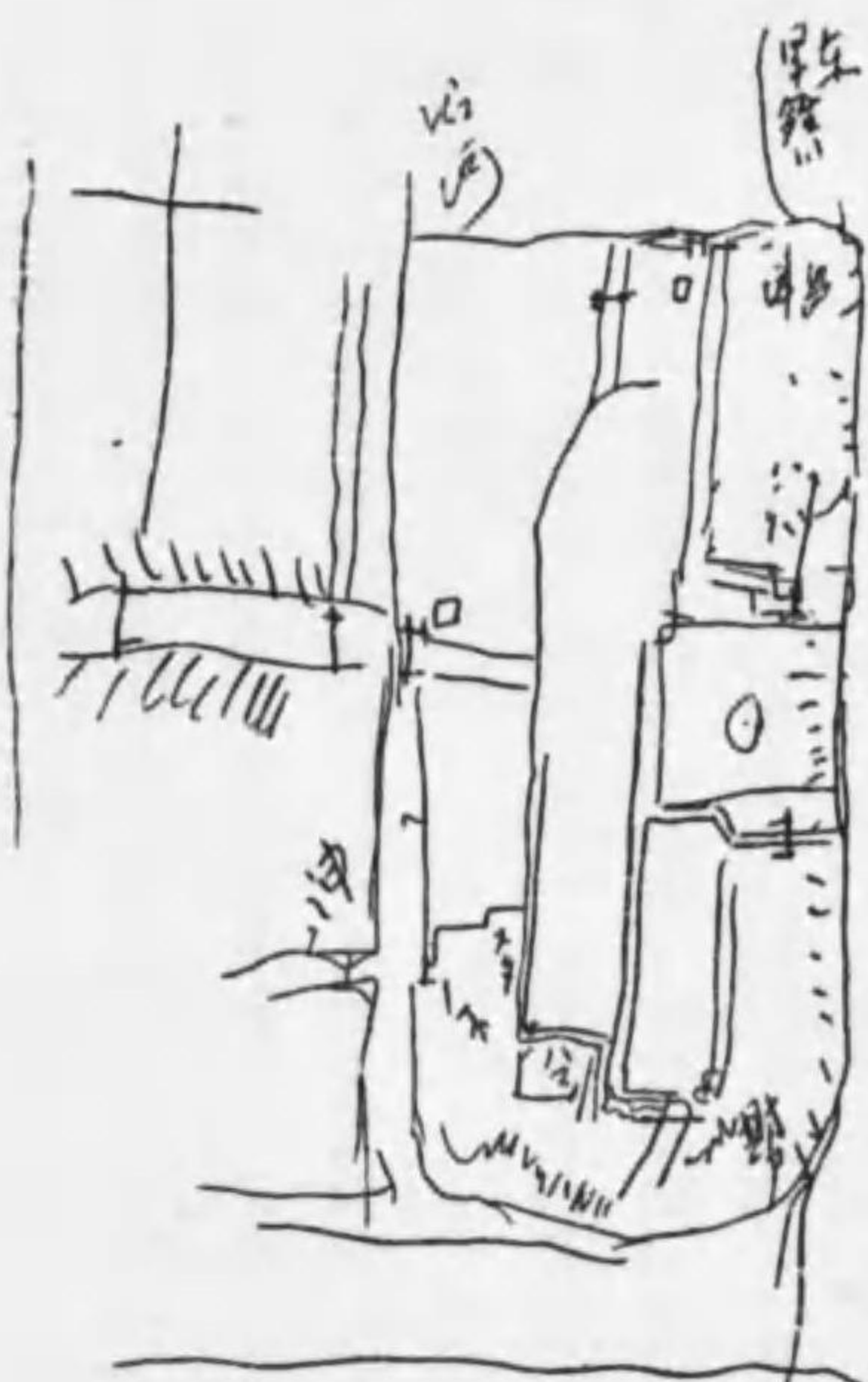
○都城の史蹟は澤山ある筈ぢやな。君が書いた八勝どこぢやない。もつと大きなのがあるの。どう



しても早く標柱を立てんといかん。都城はあんな方面はおくれちよるよ。金がないなら石に限つた事はない。木でもいよ。たゞ其の保護は氣をつけないといかん。

○史蹟調査には小學生を利用するといふ。一人で土器石器の蒐集などすると、なか／＼骨が折れるからな。

○大和民族は南から来て海に沿うて北へ進み鹽釜あたりまで行つたらしいな。神武天皇東征前の事情など調べたらよからう。天ヶ峯など面白いと思ふ。何時かの手紙にも書いてあげたがな。あの通



りで、どうも天ヶ峯の上の様子から見ると、海岸から山奥に逐ひ込まれた先住民族が出て来やうとするので、海岸に來た連中が之を防ぐために造つたのぢやあるまいかと思はれるな。住吉山附近へかけて、よい防禦地ぢやからな。山の中に押し籠められた連中は魚や貝がほしさに出て来やうとするから、この必要があつたぢやらう。

○中之郷の田圃が池であつた事はつぶきで分るな。之も大きな障礙であつたが、又防禦物だつたぢやらう。郡元の方に居る者は南から來る者を防ぎ、安留方面に居る者は北からの攻撃を防ぐ事が出來たのぢやらうな。

○足利時代の支那貿易の通路を考へやつた事があるや。之は外之浦・坊之津を経由して行つたらしいな。丁度よい航路ぢや。瀬戸内海を通ると海賊がふんだくるからな。文之和尙が生れたのも外之浦だつたな。勿論、外から來た人々といふ事ぢやが。こんな關係で漢學も早く開けたわけぢやな。

○下城した時、新邸の地を彼の所に選定した理由を知つちよいや。どら、そのノートをやつて見やい（ノートに略圖を書かれつゝ）こゝが今の島津邸ぢやな。これが南方の崖ぢや。之が姫城山で、之が天神山、この天神山を中心として新邸が出來た。之が老中馬場で、之が櫻馬場で、之が虹馬場、之が普請方小路、之が北口で、之が松元馬場ぢや。こゝが西口で、財部どんが此處で、この所に榎門があつて、この内側の此處に番所があつた。こゝが東口で、こゝに榎門があつて、こゝまで高土



手があつて、老中馬場は往還から見すかされぬやうになつて居た。この番所のある所は今の石原の屋敷ぢやな。石垣があるやうぢや。北口の楯門は此處にあつて、番所はこゝにあつた。此の東口・北口・西口の三つが三口と言つて大切な所ぢやな。それから姫城山の西の此の所に楯門があり、この普請方小路に一つ。須田どんの側から、こんな曲つた狭い路が松元馬場に出て居たが、この出口の一つ。天神山の西に鷹部屋小路ちうのがあつたが、この南の方の坂の中頃に一つ。上町の入口と唐人町の出口の一つ宛、楯門があつて固めて居たのぢやなア。

南の方は崖で要害がよかつたが、北の方は少し弱いなア。しかし沼河の川があるし、北に行くと圓通庵の川があり、もつと北に行くと前田の川がある。西の側も崖になつて居たがな。南側の下を流れて居るのは堂の川だつたな。早鈴川ともいふが、この川など立派な堀になる。川下の横矢のきく所を堰いて水量を増すのぢや。沼河でも前田の川でも同じぢや。そして此の高地に四組の士族を置き、其中に新邸を構へたのぢやから、なか／＼よく考へてある。

○維新前に勤王思想が都城に來たのは、どんな系統をひいて居るか知つちよいや。あれは京都から來たのと鹿兒島から來たのと二つあるな。京都からは大館晴勝等によつて來たので、鹿兒島からは肥田どん達ぢや。

○高崎崩れちうのがあるが知つちよいや。

○八田知紀は何處に來て居たかなア。竹之下の西明寺の北側だつたなア。誰か引つばち來ちよかいな

ア。大分都城の益になつちよいなア。

○人見勝太郎や梅澤などが來た事があるなア。あの時、撃劍會があつたなア。

○何でも分らん事があつたら言うてやれば大山どんのやうな學者に調べち貰うてあげるからなア。發掘物でも、まだ大きなのを送いやい。東京ん送いやらんと遅れるど。

○もう大抵こすこちやつた。都城ん歴史は何人がよりや？一人や。いや、君のやうな學者があるから甘く出來上らう。おいも、もう永うは生きらんかい。はめつけやいを。何でも言ふち、やいやい。

## 第八章 御返事遷延の御報知

十月廿日に上原元帥が水間旅館に於てなされた御話の要領は、間もなく淨書して、市長助役に見て戴き、土持幸平、川越實兩氏にも見て戴いて、直に一之宮の別荘宛に、手紙を添へて差上げた。その大体は前章に掲げた通りである。其後、約一箇月半ばかり過ぎて、年の暮に、元帥より一枚の御端書を頂いた。次に掲げるのが即ち之である。元帥は都城より御歸りの途中、御不快のため西之宮に御滞在で御療養をされたので此様に御返事が遅れたのである。元帥はどんな者にも直に御返事を下されるのが常であつた。それほど厳格な人であつた。それで、長い御旅行の後で、且つ御病氣の後でもあつて、非常に御疲れになつて居られるにも拘らず、その上、山積して居る書類の中に、私よりの封書



を御手にされるや、直に御筆を取られて「御返事がおくれるから許して呉れ」との御端書を下されたのである。この温い御心持を拜するだけでも涙が出るではないか。何處に之ほど行届いた人があらうぞ。御端書は例によつて繪端書の裏である。表の繪は東洋農業株式會社用水幹線の一部で問題でないが、裏の本文宛書など元帥の御筆でなつかしく拜せられる。本文中「幸侃塚云々」とあるは、其後、又、報告や質問を長々と書いた手紙を差上げたが、其中の一つである。

(本文)

御手紙敬披、御多祥奉賀候。先度之訂正用御封書正ニ相届キ候。長々留守致シ、且疲勞モ有之候爲メ、乍思御返事遷延今日ニ立至候。事情御汲分ケ御海恕被下度御座候。又夕幸侃塚其他ニ付テモ何分可申上候 以上

(宛書)

宮崎縣  
都城市  
市役所(氣付)

前田 厚様

十二月廿三日

上總一之宮海岸

復 如 庵 生

(前印) 千葉一宮五年十二月二十三日



第九章

御話要領筆記を御返し下さ

れし時の御書簡

昭和六年正月月中旬、元帥から重たい封書が着いた。それは前年十月廿日水間旅館に於ける御話要領筆記に元帥が筆を御入れになつたものと、長い〱御手紙とであつた。封筒は市役所内前田宛になつて居たが、本文は土持、川越兩氏と前田と三人宛になつて居る。封筒は失つて今は本文だけ残つて居る。次に本文を掲げるが、之を以て如何に元帥が郷土史に對して深い造詣を持つて居られたかを知る事が出来やう。元帥の御自筆である。

(本文)

尙々

亂文亂筆例之通ニ御座候

御推讀希度候

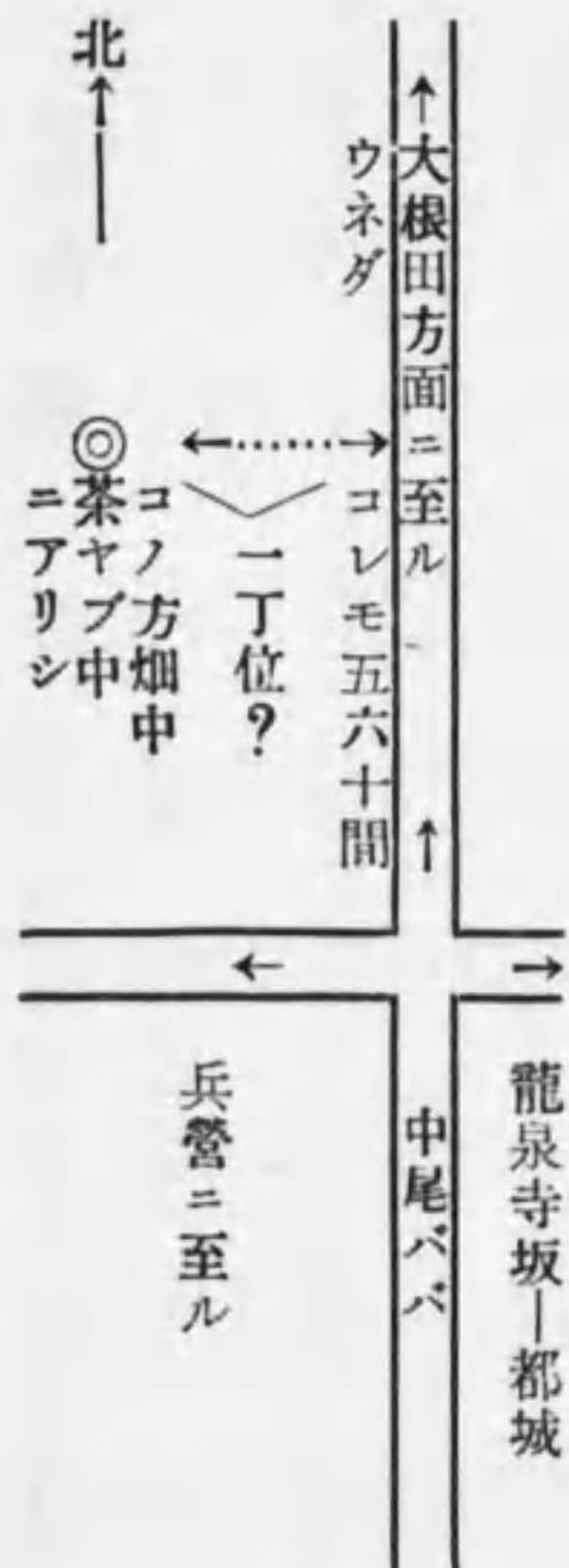
各位御揃益々御健祥御迎年珍重之至ニ奉存候。別書前田君ヨリ御郵送被下候草按氣付之點筆ヲ入レ差上候間、尙其上ニ加藤純吾氏ヨリ女學校長ニ送ラレ候原文篤ト御參覽ニテ、意味之取違ヘタル個所々々ハ御訂正被下候様ニ希上度御座候。又夕明治二年乃至四年ニ亘ル間之歴史ニ就テハ、史實ト相異モ有之哉モ難計、或ハ劣生ノ史眼不徹底モ無論免カレ申間敷候間、「悉ク書ヲ信ゼバ



書無キニ若カス」底之御見解ヲ以テ、御研究願度御座候。

明治元年即チ維新前後ヨリ廢藩置縣ニ至ル間ハ、所謂劃期時代のノ大變遷デ、最モ大切ノ歴史ト存シ候ガ、三島地頭ノ配下ニアル行政區分ハ、初メハ三ヶ郷ニテ都城領土外ノ部分モ加ヘタルガ之ヲ除キ又改メタル後、現今ノ如クナリシハ記憶シアリ、文書モドコカニ在ルモ今見當ラス。依テ三ヶ郷之變移ノ如キモ、當時之容子ヲ知ルニハ研究モ面白カラシ。政治的、經濟的ニ壓迫、擄取、幾ント掠奪的行爲ガ、今日ノ露國風ノ如カリシ事ハ注意スベキ事ナレバナリ。

客月末、前田君之御手紙ニテ承リ候古塚一條ニ付キ申上候。先度申上候鷹野藏附近之神田橋又兵衛(野々美谷城ノ頭ニ討死ノ)首塚ハ御發見無之カリシウチノ劣生子供時分ニハ小石碑も存在シ居リ候。而テ先年津曲豐廣氏同伴、中尾馬場ハ西墓地ニ參リ候途中、車上方土地之人ニ尋ネ候折ハ、其存在之旨答ヘ候ガ、位置ハ



此存在ハ古文書(庄内地誌ノ平治記ノ軍記)ニテ一讀シタルコト有之、又タ其節御話申上候通、又兵衛戰死當時着用之鎧之始末ハ篤敬翁承相成居候ニ付、或ハ右之首塚ノ所在も存知歟トも存シ候。幸侃云云ハ初耳ニ候。庄内地理書其外ニハ記載無之候？御判斷之如クニ、幸侃妻ハ中々ノシタタカ者ニテ、中央政界ニ風雲ヲ捲キ起サント、内閣ニ向テ嗾訃シ、家康ノ一蹴ニテ妻子も家來も退去ヲ命セラレ、下國シタレバ、都城ニ墓地ハアリ得ル譯ニ候。併シ庄内戦後直ニ都城地方ハ長千代丸公之手ニ入りシコト故ニ、若シ墓トシテ残り居タトシタラバ、幸侃ノ爲メニヒドイ目ヲ見テ、恨ハ骨髓ニ徹シタル北郷主従ノ爲メニ、復讐的之仕事ニ逢ヒシ筈、左もナクテ、源次郎ガ帖佐ニ一萬石デ移封シタ時ニ、墓ヲ移シタトモ見ナクテナラヌト思フ。左スルト墓地跡デハアル歟モ知レス。庄内地理志ニハ何等ノ記載もナイデス？十分ノ調査研究ヲ要スルコトデ、傳説トシテハ兎ニ角ニ、輕卒ニ墓ト斷定シテ施設ナドスルコトハ如何ナモノ歟ト存シマス。

○タツチヨウ(立塚)ノ語ハ辭書ニハ兩様共ニ別紙片ニ轉載ノ如ク見當ラヌソトデスガ、塔頭ツツトウト原語ヲ漢音ニテ使用シタ語ガアリマスカラ、或ハ、ソレガ方言ニ多少之相違ヲ以テ、塚トカ墓トカニ成タカモ知レマセヌナ。○幸侃妻女ガ八萬石ノ城トシテハ狹隘ナリトシテ増築シタルハ、取リ添ト稱スル龍泉寺阪ノ直ク南ノ一廓ガソト聞イテ居リマス。幼時ニハ阪ノ上ノ南カラ堀ノアトガ在タト思ヒマスガ、但シ此増築ハ籠城ノ時カ、又ハ、鹿ノ屋カラ來テ直クカハ知リマセン。多分、八萬石ニナリテ、有名ナル白石ノ如キ浪人共ヲ多ク召シ抱ヘテ、其必要ヲ見タカラテハアリマ



セン？○小杉重頼ノ墓ト稱スル杉(松デハアリヤセンカナ。ヨク記憶セズ。)ノ位置等ニ付テハ信一君岩切氏(スグ近クニ住居サレタ)能ク存知ノ筈、又タ重頼遭害ノ屋敷跡ハ今ノ女子小學校域内デ、安山万壽、龍岡篤敬兩屋敷ノ中間ニアリ、竹林中ニ老大ノ松一株アリテ、重頼其他ノ屍ヲ埋メタトコダト耳ニ残り居候。今日デも何カ學校内ニ印デもシテアル歟も知レヌガ、土持綱晟君方此松ノコトハ記憶シ居ル筈ト思フ。澤田ト申ハ高山先生ノ經過路トシテ都城ニも記念碑ヲ建テント云云、其位置ノ選定ニ付御問越相成候得共、コレハ何共私々御返事申上兼候次第ニ御座候。坂元君ニも右御傳へ希度御座候。以上

一月八日

大井町鹿島谷

上

原拜

土持 幸平様

川越 實様

前田 厚様

御連名御免被下度候

追テ劣生も年末ニ出京、年末年始之諸儀禮之爲メ未ダニ滞在致居候。今八日は陸軍始御式ハ雪ニテ御取止メニ相成候て失望仕候。コレテ何事も相終リ候ニ付、一兩日中ニ一之宮ニ歸リ靜臥之合ニ御座候。至て健康ニ御座候。乍余事御放念希上候

(別紙)

○「タツチヨウ」「ダツチヨウ」は字書に見當らず候へ共「タツチユウ」は左の如き意味に候。言海に曰く

たつちゆう 塔頭〔字ノ音ノ音便〕大寺の境内ニアル小寺、寮、寺中

辭林に曰く

たつちゆう 塔頭〔字音ノ音便〕大寺ノ境内ニアル小寺、寮

## 第十章

### 土器破片入木箱を差上げた時に 下された御返事

元帥から「土器破片を送つたら學者達に頼んで研究して貰つてやる」との御話が前からあつたので二月の二十八日土器片一箱に散布圖を添へて手紙と同時に差上げたが、之に對して次のやうな御返事が來た。比較的完全なのは數が少い上に毀れる恐れがあるため送らなかつたが、之に就ては御機嫌がよくなかつた。けれども縣の調査員の人たちも送らぬ方がよからうとの事だつたので送らなかつたのであつた。當時、小少將物語や小辨物語などエロチックな物語を三州紙上に連載して居たので、之に對しても御叱言が出て居る。また、小箱を送る手紙の中に首塚の發見や幸侃だつちよに關係して城山の取添城の話なども書いて置いたので御書面の中に現はれて居るのである。



## (本文)

去る廿八日附の御手紙と木箱一個三日儘に届きまして拜見致しました。土器は都城で申上候通り研究調査に便なる様に相當の太さを有せざるべからず。又は小片を繼ぎ合せて其原形を全部若くは其一部により全部を想像し得る如くする。其出土の現況即ち古墳より出たとか先住民の部落跡とか等の御説明を添へて御送りではなくては發見地分布地圖等御手紙の文面のみにては學者ども首の振り様もないだろうと存じますが、しかし先づ御預りは致し置きまして機會を待つて學者ども達に見せませう。首塚を御發見の由御同慶に存じます。先達て申上たる小杉家の潰跡及幸侃タツチユウ等の御研究の結果、幸侃の女房の築きたるといふ取添城の跡などは上原が記憶と相違致して居ますが如何か御序の節御知らせ下さいませ。小箱の内には御申越しの品々入つて居りました。御禮を申し上げます。よけいな事ですが、川越どのに言ふて下さい。小辨や手習や小少將(桑山)の如きエロ物語も時節柄悪くはないだらうが、時々は地理誌に有る正應寺門前の鼻たれ小僧の奮發して鹿兒島に出で遂に市來港から支那に飛出し三十年もして鹿兒島に歸り立派な深見といふ御士となり支那貿易を發展させ其次男は長崎に飛出して長崎奉行に奉公して末に江戸まで進み出して出世したと云ふ堅忍不拔の標本、又は鹿兒島の武士と〇〇との出入の際〇〇の打手の募集に應じて今の照國神社の手前にて立派に目的を達したる早水、高木原の勇士ども達の豪快談等も新聞紙上に出しては如何ですと傳へて下さいアハ、ハ、ハ。以上御返事まで申し上げます。只今は

筆を取る事をお醫者どもから禁じて居ますから代筆で失禮いたします。上原も益々元氣で居りますから先輩や友人達に御面會の時宜敷申上げて下さいませ

前田 厚 殿

上 原 勇 作

連記録の様に御話のまゝ書認め候間誤字もあり誠に御讀み悪き點も多からんと御察し申上候何卒御判讀御願申上候

代筆者

黒 木 常 盤

前田 厚 様

(封筒裏面)

上總一ノ宮海岸

上 原 勇 作

(封筒表面)

宮崎縣都城市役所

前田 厚 殿

(消印)千葉一宮六年三月七日



## 第十一章 有村治左衛門の遺跡に關聯して下された御書簡

昭和六年三月八日の三州日々新聞に私が有村治左衛門の遺跡を發表した。有村治左衛門といふは萬延元年三月三日水戸浪士等と共に櫻田門外に井伊直弼を襲ひ其の首級を打ち落した快漢である。其父有村仁右衛門は鹿兒島の藩士であるが嘉永年間山田高崎崩れ即ち所謂お由羅騒動に關係し、其責任を負うて都城市外五十市村大字横市の尻枝門といふ一組の百姓家に隠棲謹慎した。そして鍛冶を業とし鍋のつりなどを造つて居た。其の尻枝門の位置は横市橋より東南二町ばかり、母智丘の神主久保田老の北隣で今は水田となつて居るが當時は老樹茂れる森の中であつた。其の頃、治左衛門は十歳ばかりの少年であつたが、父と共に來て居た。彼は父が鍛冶をして居る傍で擊劍の稽古をした。其の方法が面白い。始は三尺ばかりの木刀を以て土手を打つて居た。その木刀は先が大きくて手元が細く初の中は漸う持ち上げる程であつたが毎日々々振り廻す間に何時のまにか軽々と取扱ふやうになつた。すると今度は大きな杵の木に向つて打つて掛つた。ぶツ突かつては離れ、離れてはぶツ突かり、體當りの猛練習だ。最後に大きな眞劍で練つた。之も始は漸く持ち上げる程であつたが後には軽々と振りまはしたといふ。この元氣でぶツ突かつて叩つ斬るのだから井伊大老の首も一たまりもなかつた筈だ。大體かやうな話を發表したものである。

すると其後數日を経て其月の中頃上原元帥から一通の御書簡が來た。次に是を掲げる。代筆であつて急いで筆記された爲めに誤字が多いので訂正して掲げる事にしやう。

### (本文)

御元氣でせう。先日は手紙を上げましたから御受取りでせう。去る八日の三州を見ますと、都城史談の項を見ますと、有村治左衛門の遺蹟と有りまして其おやちどんが五十市村尻枝門に來て居たので治左衛門君は親を尋ね來て居た遺蹟が分つた様ですが誠に大切な發見の事と存じます。事實なりとすれば山田―高崎崩れは嘉永二年の冬から翌年の春にかけてと思ひますから治左衛門は十歳前後の年頃と思ひます。治左衛門の兄弟は長兄有村俊齊、後の海江田信義子爵、次男の雄助三男の治左衛門、末子は國彦である故、東京でも其事實を確める事は容易ですから探しませうか尙其地でも取調べて知らして下さらんか。同じ事件で大歌人の八田知紀(喜左衛門)先生も都城に謹慎のため寺入されたる事實は確の事故は是はすでに史談會にて調査研究も終り居るはずですから同じく知らせて下さい。山田、八田、大館晴勝先生の一系列は梅田源次郎先生等の一味同志故八田先生の都城潜居は何等かの因縁無くてはならず、従つて本問題の有村おやちどんの五十市村の一件も是に關連して居りはせんですか。以上失禮ながら代筆を以て御尋ね申上候

三月十一日

上原 勇 作

前田 厚 様



(封筒裏)

上總一ノ宮海岸

上原勇作

(封筒表)

宮崎縣都城市

市役所

前田厚殿

(消印——千葉一宮六年三月十二日)

## 第十二章 八田翁に關して差上げたる書面に對する御返事

三月十一日附を以て元帥より下された御書簡に八田翁の事など取調べよとの事があつたので私は早速着手したのであつたが、丁度其頃各學校等が休暇となり、學徒の來往頻繁であつて思ふやうに調査が進まないのみならず、各方面に收獲もあつて八田翁のみに専心する事が出来なかつた。その間に風邪にかゝつたのを知りながら東京あたりより來た學者の案内などして居た爲め病勢惡化して肺炎とな

り、四月十三日より五月廿三日まで四十日夜病床に横はらねばならなかつた。けれども幸にして全快して再び調査研究を続け、六月十日八田翁に關する研究を書面に認めて元帥に差上げたのであつた。すると折返し元帥より御返事が來た。長い御直筆の御手紙で郷土史上貴重な記事があふれて居る。次に之を掲げる事にする。

(本文)

去十日之芳箋敬披。長々御病氣ニ有之候山之所、既ニ御全快之趣珍重之至奉大賀候。尙此上御保養祈上候。郷土史上之異彩之一頁タル八田先生之地方ニ及シタル文藝上、殊ニ志向上之効果ニ就キ追々ト御調査モ進捗ノ由、大慶ト存候。先生ガ高崎(山田)崩レニ連坐シ參慘之目ニ逢ハレタルハ嘉永二年冬——三年春之出來事ニテ順聖公之太守ハ四年二月ナルヨリシテ八田先生之都城入ハ四年十月ト御推定至極御尤ト存候。西明寺居住ハ寺入之形式ナリシ哉、或ハ鹿兒島ニテ一往之所罰ハスミテ尙謹慎ヲスルトシテ西明寺ニ屏居之形式ナリシ哉、恐クハ當時之形勢ヲ揣摩シテハ後者ナラン歟。景雲亭云云之疑問ハサル事乍ラ西明寺ハ動カヌ所ナル可シ(幾多之傳説之信ズベキアリ)順聖公之逝去ハ五年七月ナレバ六年迄之都城居住ハ少シ長過ギル之疑モ生ジ候得共、順聖公之死後之急變ニハ實ニカヲ落シテ掛リ合ハスト燒ケニ成テ居タカモ知ヌトモ思ハル。八田家ニ保存之掛ケ物云云寫生ハ速見晴文先生之筆ニハ無之候哉? 中泉亭トハドコニ在リシ哉? 通船亭(通船小屋即チ大橋之下流一丁計現今江夏家之醸造所之邊ニテ赤江口迄大淀川ヲ舟下シ之航路發



起點デ此ニ役所アリ通船亭トモ云テ夏向ハ西風多キ都城地方デハ唯一之納涼遊宴會場ナリシニ  
 ナハナキカ？或ハ通船ヲモヂリテ中泉ト雅稱之ツモリ歟？明治三年ハ劣生在廳中ニ付先生之來都  
 一萬城村田別莊滯留記憶無之、當時ハ三島騷キ之最中ナリシ故ニ或ハ有意味之來都ナリシカトモ  
 思ハル、ガ痕跡無之候哉？巡查杉田氏寫眞所持之由幸ノ事ニ付寫眞之上ニ市誌ニ御收容御尤ト奉  
 存候。速見家ニハ晴文先生カ寫生シタル八田翁之畫像有之筈ナリ。コレハ今カ二十年前頃之ヲ寫  
 眞ニシ其一葉ヲ曾我祐直君カ送り吳ラレ秘藏シアリシガ鹿兒島縣會之當時之議長タリシ折田兼玉  
 君ガ是非ト懇望ニテ割愛シタルガ當人死去後ハ劣生之許ニハ來ラスシテ八田家ニ保存之様ニ傳聞  
 シ居候。曾我昭若君所藏及ヒ其他現存之古文書ニ由リ如何ナル經路手續キニテ八田先生ヲ都城ニ  
 引キ入レ得タル歟判明致シ不申候哉。去年十月御直話モ申上候通り敢テ此事ヲ取計ヒタルハ大出  
 來ニテ都城ニハ當時其人アリシト感服致居候次第ニ御座候。○八田先生連坐之高崎(山田)崩レ之  
 同列罪名書ハ嘉永四年頃實父カ大川原善助殿カ借入レ寫取ト書付有之候モノ現存致シ居候間都城  
 ニハ現存之モノ多カラント存シ候。右人名中ニハ有村治左衛門之父(横市ニ居リシト云フ)之名ハ  
 無之、多分輕キ所分者之中ト存シ候。○御編纂中之市史之三島時代之續キ都城縣カ宮崎縣トナリ  
 テ政治經濟之兩方面之爆發トシテ七年二月之下長飯村外十二ヶ村之士族農民之暴動ハ珍敷モノナ  
 ルガ、當時之縣令福山某氏ヨリ報告太政官日誌ニアル筈、劣生之手許ニモ寫シ有之、隨分ト面白  
 ク當時ヲ偲ビ候阿々

以上御返事旁御禮申上度

かしこ

六月十五日

勇 作 拜

厚 様

(封筒裏)

千葉縣一之宮海岸

復 如 庵 生

敬 酬

(封筒表)

日 宮崎縣都城市

向 市役所氣付

國 前 田

厚 様

私 信

(消印——千葉一宮六年六月十五日)



## 第十三章

古文書展覽會目録及び史蹟保存  
碑建設地圖並に目録を書面と共  
に差上げた時下された御返事

昭和六年十一月廿六七の兩日、市内南小學校に於て郷土研究會が催された時、其事業の附屬事業として古文書展覽會場を公會堂に設け尙古館と名づけて一般の觀覽に供した。そして又以前より着手して居た市内史蹟保存碑四十基の建設を急いで二十五日に完了したので其の位置を示す地圖と目録と共に尙古館の目録を元帥に差上げて、同時に書面を送つた。其の書面の中には其頃疑問として居た臺灣征伐参加人名の事なども書いて置いた。然るに元帥からは折返し御返事を下された。即ち次に掲げる通りである。但し之は代筆である。

(本文)

十二月十二日附御手紙有難く拜見仕候。時下益々御元氣にて眼と手と足とにて郷土史の事に御盡力の珍山重至極に奉存候。御骨折にて史蹟標碑も其一部十一月中に完成仕候由、又古文書及文藝品と御取集め方御計畫之處多數熱心賛成にて候由是亦欣快の至に御座候

明治七年都城より古垣俊雄先生家兄統率の下に砲兵隊出征の始末はほど承知致居候へ共其人員は全く承知仕らず、只都城より幹部の有力なる一人として永井孝七と申す人(鷹部屋の小路の角屋

敷)有候事は同氏の逸話を承知した事がある。此砲兵隊の編成は熊本鎮臺にて編成され候に付第六師團へ御聞合せならば或は分り候かとも存じ候(多分不明ならん)古文書展覽會の目録並に史蹟標碑の寫眞拜見仕候。此目録によれば史の参考となる古文書日記類等はまだまだ多く由緒ある家は覺書日記等かくされ居候はんと存じ居候事に御座候。又残りの分は御取集めの由其節更に承り度存じ居候。史蹟中にある「御學問所」とは何れに有之候や「明道館」の事に候や。「講武館」は明道館と背合せに有之候事故或は御學問所とは是を合併したる次第には無之候や。「南御茶屋」とは甲斐元の長瀬氏の下の處に有之候ものや。「中泉亭」とは先般申上候「通船亭」の雅號にても有之候や。其位置と共に御知らせ願上候。老生病氣は日々回復致し居候間何卒御安心願上候

十二月十九日

上原拜

前田厚様

(封筒裏)

十二月十九日

上總一ノ宮海岸

上原勇作

(封筒表)

宮崎縣都城市



市役所

前田 厚殿

(消印—千葉一宮—六年十二月廿日)

### 第十四章 上村の古塚につき問合せた時の御返事

昭和七年の四月頃、上村の古塚の附近に地下式古墳があつた事を其地の所有者木幡氏より聞いて實地に調査した。そして古墳として此の古塚及び附近を取扱ふ事が適當ではあるまいかと思つたので之を元帥に問合せ御意見をうかづたのであつた。そして次に掲げるやうな御返事を頂いたのである。但し之は代筆である。なほ此の古塚は縣より古墳の取扱ひをする事となり、標柱及び制札を建てゝある。

(本文)

時下益々御壯健珍重に存候。扱先達て御手紙にて古墳一條愚見を御問合せ相成候に就き御返事申すべきの處幸ひ津曲氏來訪相成候に付き傳言相たのみ候處承る處に依れば同君は暫らく在京の由に就き更に御返事左に申述候。

此古墳は何等傳説も無之候。又文獻の徴すべき者も無之候以上之に手をつけ候は如何に有之べく候や。只今の處にてはそつとして置くより外に手段も有之間敷存候

上原の意見は右の如くに有之候間此旨御返事申上候

四月十六日

勇 作

厚 様

(封筒裏)

宮崎縣都城市

市役所氣付

前田 厚殿

(封筒裏)

上總一ノ宮海岸

上原 勇 作

(消印—千葉一宮七年四月十七日)



## 第十五章

九州並に沖繩縣市長會議及市會議

長會議が都城市に於て開催された

時に製作したパンフレット其他を

送つたのに對する御返事

昭和七年四月都城市に於て九州並に沖繩縣市長會議及市會議長會議を開催された時に、之が爲に市附近の鳥瞰圖、附近名稱繪端書、各種事業の報告、市勢要覽、都城の片影、其外多くの印刷物を製作したので、其終了後、元帥に之等を差上げたのであつたが、之に對して御返事が來たのが次に掲げる通りである。之は代筆であつて市長と私との二人の宛になつて居る。

(本文)

謹啓

春初の候愈々御清安の趣奉賀候。楮而今度は御地に於て九州及沖繩縣の市長の會合催され其際の手書類御送付に預り有難く御禮申上候。會の方は多分好都合に運びし事と喜びおり候。又御送り下されし書類は篤と拜見仕り候。然る所劣生などを都城出身の偉人扱ひされて慚悔背を潤す次第にて何とも御挨拶の申上げやうも無之候。之に反し都城出身の人にて故郷の爲に盡力せられし人が

維新後に於ても數多き事と存じ居候が其事が記載せられあらざるは洵に残念に考へ居候。例へば肥田景之翁、須田博士、町井になつた坂元良全、篤行の人には財部某刀自(屢々表彰せられし人)の如き人の名が見えず候。歴史及び之に關係する戸籍等につき遺漏ありはせずやと考へおり候。餘計の事なるも老の練言申上げ候へ共不惡御了承願上げ候

先は御禮旁々如斯御座候 敬具

四月廿四日

上原 勇 作

大山 綱 治 殿

前田 厚 殿

侍 史

(封筒裏)

上總一ノ宮町海岸

上原 勇 作

四月廿四日

(封筒表)

宮崎縣都城市役所

大山 市 長 殿



前田 厚殿

貴酬

(消印——麻布七年四月廿五日)

## 第十六章 病氣御見舞に對する御返事

昭和七年の暮には元帥は頗る健康を害して居られた。そこで御見舞の意味で何かと書いて差げたのであつた。そして十二月の廿八日に熱海に轉地されてから代筆を以て御返事を下された。

(本文)

去ル二十五日の御手紙二十八日東京にて拜見仕候。押詰り候へども益々御壯健の由珍重に奉存候。都城市史の事に引続き御盡力の由、此完成を地方人養成の爲めのみならず、國都鐵道も開通し、又是よりは霧島國立公園も手を附られ候由に就ては旅客も多く候べくに就き、學生學者觀光者等に都城地方のかくれたる過去を紹介すべき此郷土史の早く出來上る事は地方民衆の熱望致す處に有之べく、勇作も其尖端に立つ者に御座候。何分宜敷御願申上げます。二十八日當地へ轉地靜養中に御座候。病後未だ執筆不可能に就き代筆を以て御返事申上候

十二月三十日

上原 勇 作

前田 厚殿

(封筒裏)

十二月三十日

伊豆國熱海狩場

伊地知別荘内

上原 勇 作

(封筒表)

宮崎縣都城市

都城市役所

前田 厚殿

(消印——静岡熱海七年十二月三十一日)

## 第十七章 上原元帥訪問記(其一)

昭和八年六月初、突然安山助役から病中の元帥を訪問せよとの命を受け、八日夜出發、十日午頃着



京直に品川驛前品川旅館に投宿、此日は知友親戚等に電話などかけて置いて休養した。翌くれば十一日午前九時十五分、旅館前より自動車に乗つて大井鹿島町の上原元帥邸に向つた。運転手は二度下車して漸う探しあてゝ呉れた。玄關横のボタンを押すと執事木村春吉氏が出て來られた。そこで名刺を差出すと、

「あゝさうですか。閣下は先程から待つて居られます。どうぞ、お上り下さい」

と言はれるので、上村家と龍岡篤敬翁からの御見舞品を執事に預けて早速御座敷に通つた。閣下は藤製の安樂椅子に掛けられ、其傍に一人の和服の紳士が居られる。都城を出る時も途中に於ても、お目にかゝつた時の挨拶を考へて居たのだが、實際にお目にかゝつてスツカリお弱りになつて居られる御姿を見ると、餘りに強い刺戟のために挨拶が前後して何を言つたか分らなくなつてしまつた。それでも、どうやら挨拶をすませると、傍に居る和服の紳士が、

「私は益田ですが、どうぞ宜しく」

と言つて名刺を出されたので始めてそれと知つた。閣下は意外の面持で、

「未だ知りやらんとや」

と訊かれ、益田さんが、

「年が違ひますから直接は知りませんでした。紙上では度々お話しして居ります」

と説明されると、閣下は微笑して居られた。全く其の通りで、紙上ではよく激勵や注意を與へて下さ

れたが、直接お目にかゝつたのは始めてである。之が益田玉城畫伯であつたのである。閣下は語を更められて

「今度、君が來るといふ事は全く意外だつた。誰でも委員が上京したら序に寄つて貰つて君に傳言して貰はうと思つて居たのぢや。一二時間もあつたら充分で、是非言つて置かねばならん事があるからと言つてやつたのぢや。處が君を上京させるからと言つて來たので早速益田君に連達を出して來て貰つて君と一緒に聞いて貰ふ事にした。それは外の事ではない。都城の市史を上原の指導で書くやうに考へて居るが之は大なる考へ違ひぢや。よく出來て之は上原の指導で出來たさうぢやと言ふ事になれば人のした功績を横取りするので虚偽ぢや。又悪く出來て之が上原の指導で出來たんださうぢやといふ事になつても之は虚偽ぢや。どちらにしても善くない。それで其の責任の所在を明かにして置いて貰はんといかん。それで君と上原と二人だけの話では後日はつきりしないといかんと思つて益田君に連達郵便を出して來て貰つたのぢや。この事はよく大山市長にも安山助役にも言つて呉れたい。」

此前に神田君が來た時、一休都城の市史は何時出來るやと言つたら「私は係ぢやぐわはんかい」と言ふたから「係ぢやろが何ぢやろが此の事だけは熱心にやらんといかん」と言うて置いた。それで火がついたのぢや。間もなく委員が何人出來たと新聞に出て居たな。何人や？」

「二十五人ばかりぐわんす」



「そうや、二十五人はどんな人や？」

「助役、市會議員、中小學校長たちぐわんすが」

「うん、さうや、委員長は誰や」

「助役が纏めやんすが」

「助役が委員長ぢやな。まあ、そんな人たちが相談してやいやるのに上原が意見など言ふわけに行かん。あの都城史の謄寫すりを第一巻と第二巻が送つて來た時、意見を言つてやれと言ふ事ぢやつたけれども「今何とも言へんが、全部出來た時何と言ふかも知れん」と答へて置いた。すると又第三巻が來た時、又同じやうに言つて來たから同じやうに答へて置いた。一体委員長が相談して作つた物を上原が何とか言つたからといふので變へるといふ事があるむんや。あれは、あのまゝ作ればいゝぢやろ。上原は之に對しては責任は持たん。此の點ははつきりして置かんといかん。」

此の事は君が目錄を送つた時、上原の指圖に従つて作つたやうに書いて居たから、そんな事はないと言つてやつたが、あの手紙は持つて居るだらうな。あれを大山市長にも安山助役にも見せたい之だけ言ふて置けば上原も安心ぢや。」

都城史の範圍ぢやな。之はたゞ市史だけぢやなくて郷土史ぢやな。大体あの盆地がどうして發展して來たかちう事を書けばよいのぢや。之をひろげると鹿兒島やら宮崎やら延岡やら北九州やら何處までも擴がつて行つてしまふ。そして量ばかり大きくて中味は少しになつてしまふのぢや。又島津

家の歴史でもねえぢな。島津家のは島津家で書きやろ。

一体この郷土史の精神は何だと思ふぢやないや。之は愛郷心の養成ぢやつど。島でも自分の古巢に歸らうとすつどが。殊におんぢよ鳥やばゞ鳥になれば猶更ぢや。人間もおんぢよになれば生れ故郷に歸らうとすつなるからな。之が愛郷心ぢや。この愛郷心が愛國心の本ぢや。愛郷心のない奴に愛國心はないからな。それで只昔の事を書き並べても此の精神が籠つて居なければ何にもならん。此の心は上原が水間で語つた時、地質學者を呼んで貰ふと云ふたな。それから考古學者を呼んで調べち貰ふと云ふたな。まだやいやらんぢやないが。之が分らんと先住民族の事も分らせんがな。瓦どんが、あすこに出た、こゝに出たと言ひやつどん、あげな南國の山の中に何が古い物があるむんや。北の滿洲のやうな木や竹のない所なち煉瓦などが早くから使はれて居るから住居の跡も残つちよるどんな。竹の柱に茅の屋根で住まれる所では、そげなむんな無いかいな。一体、熊襲んこつどむ委しう書いぢよいやいぢやないが、あれは何になつとや。熊襲が位どむ貰ふたことどんが並べぢやないが、あれは中央の武力がねごつたむんぢやかい、だまかしの手はくらはしたのぢやがな。犬の吠へる眞似どむさせぢな。丁度今頃臺灣の蕃人を連れ來て、赤い

反物どむ一反づゝ呉れち、大官などが自分で會うてやつて「よく來た。感心なものぢや」とほめてやるのと一寸も違はせん。あげな事が何にないや。熊襲に就ても色々説があるな。熊族と襲族とを別にして居る學者もあるし、分りやせんがな。久米部や物部も關係があるな。苗部といふ事も



聞いて居るなア。昔は佛語でムーンで之に部をつけるとムン部で物部と同一のやうに言ふ者もあるなア。こんな學者どんの説はどげんでんなるが、正史は動かす事は出来んど。六國史どんもよく調べたら間違ひがあらうが之には觸れんことだなア。正史を破壊する事は國を破壊する事だからなア神功皇后の三韓征伐は都城と何の關係があいや？」

「住吉神社の傳説と關係がぐわんすが」

「それは何に書いてあつたや？」

「三國名勝圖會から取りもんしたが」

「その名勝圖會は何時出来たのや？」

「天保十四年頃ぐわんそ」

「そりや、今から八十年ばかり前の事ぢやな。そげな新しい物どむ本にしてどげんすいや。まだ〱本に逆上らんといかん。高千穂宮の事でもさうぢや。都島のやうな所にどうして皇后どんがあいむんや。行たち見れば分る事ぢや。皇子たちは居りやつたかも知れんがなア。後は平原で前は川といふやうな危い所に皇居どむ構へやいむんや。賊にでも圍まるれば袋の鼠ぢやがな。そげな事があいむんや。悉く書を信すれば書なきに如かずぢやな。狹野神社やあの王子原あたりに行たも見やい。後は屏風を立てたやうに山で守り、前方は遠く開けてとても雄大ぢや。そして要害の場所ぢや如何にも皇居のありさうな場所ぢや。大休鹿兒島は七十五萬石の力で悪い事をしちよるなア。神代

の三山陵はどうぢや。むしろ日向の方に多くの理由があるやうぢやないか。それでも「わいどんが何を言ふか。こつちやれ」といふ風で皆取つてしまつちよるぢやないか。外のちんこめ奴どま何も言はならんかいなア。それで神代の事どま、いゝ加減でよか。委しい研究は其方の人に任せて置けばよかど。之から醫者に診て貰ふから暫く此處で待つて居たい。長くはかゝらんからなア」

閣下は令息七之助氏や看護婦等に支へられて隣席に待つて居た醫師と共に別室に入られた。其後で益田さんと話して居ると木村執事も見え、間もなく七之助氏も見えて初對面の挨拶を交はした。木村執事が玉城畫伯の「楊子江金山寺全景之圖」とか題する一幅を表装したと言つて持つて來て一同に見せたので一しきり畫畫の話に花が咲いた。その中に醫師と元帥副官とが出て來て吾々に會釋して玄關の方に見えなくなつた。やがて閣下のお呼びで畫伯のお供をして奥の御居間に通ると、閣下は床の上に仰向けに御やすみになつて薄い蒲團を着て居られる。

「御診察の結果は如何で御座いましたか」

「どうもないやうぢや。老衰ぢやげな」

畫伯との間に二三の會話がある。それから再び史談に入る。

「昔の庄内は何處から何處づいを？」

「はつきりは分いもはんが」

「そげなこつちうがあいむんや。もうぢやんと圖でん作つちよかんにや」



「北諸縣全体位の範圍ぢやぐわんすめえかい」

「うん、一番大切な事ぢやがな」

「庄内地理志に地圖があります。三俣院と庄内と分けて居りますが徳川時代頃の状態でぐわんす」

「うん、そいがあればよか」

「都城から宮崎に打出す川は何ぢやつたけなア」

「大淀川ぐわんすが」

「うん、その大淀川の上流が大岩田川や萩原川や横市川や其外澤山の川で皆都城の附近で集つて居るな。それで都城は盆地の底ぢやろ。あれだけの水が四方から集つて来るんだから、君一人が何と頑張つてもあの邊は始め水底ぢやよ。それに昔ほど水は多かつた筈ぢやからなア。吾々は七十年の間の變化は知つて居るが此間だけでも随分水は減つて居るからなア。あの盆地の底の水の悪い所にどうして地方の政府を置かねばならなかつたか知つちよいや。昔から氣候は悪いし、水は悪いし、人氣も悪い所に、どうして政府を置かねばならなかつただらうか。平季基が莊衛を置いてから島津氏が来て去つたが其後も莊衛は此處にあつた。そして舊藩時代は勿論北郷家の治所が置かれ、三島通庸が明治三年に一寸今の庄内に政府を移したが間もなく都城に復し、都城縣廳や郡役所を此處に置いて、兎に角この地方の中心として治所を此處より動かす事が出来なかつたのぢや。この理由を知つちよいや。それは交通の關係ぢやなア。此處は盆地の中心で此處に治所を置くと川に沿うて四

方に達する事が出来るからなア。

建築物で残つて居る物は城と古墳と墓と碑だなア。城には都城は勿論ぢやが、其外に安永城・野々三谷城・山田城・梅北城・高城・梶山城其他澤山あるなア。この城などもよく調べると、この部分は何時代に出来て、この部分は何時頃の追加だといふ變化がよく分るのぢや。この城の配置で見ると、山の上に逐ひ上げられた先住の野蠻人が降りて來ないやうに海の方から來た民族が築いたものに違ひないのぢやがなア。

古墳の事を君が書きちよるやうぢやが、あれでは不充分ぢやよ。やれ前方後圓だとか圓墳だとか書いただけでは役には立たん。之は何時代に何民族が居た時のものだといふ所まで達せにや駄目ぢやよ。それも獨斷ではいかんがなア。殊に石峯がどうか、穴があつて竹を入れるとかうだから地下式だとか實際掘つて見なければ分らんぢやないか。

「墓石で古いのは何處にあいや」

「諸麥にもぐわんすが」

「誰のや」

「はつきり分りもはんどん、久木崎豊前守の墓ち言ひもんすが」

「どげな墓石や」

「五輪塔ぐわんす」



「どげな形や、畫かち見たい」

そこで鉛筆で畫かいて見るけれども甘く出来ないので益田畫伯に口で言つて書いて貰つた。閣下は之を見られて

「そりや、足利時代以後のものぢや。もつと古いのが庄内の山久院にあるなア。資忠公の墓石ぢやあれなどは確かなものぢやから大事にせにやいかんなア」

此の時、女中が晝食の出来た事を知らせたので應接室に戻つて御馳走になる。七之助氏の接待で女中が給仕をして呉れた。食前酒が出て居たが玉城畫伯も餘り飲まれないので直に御飯を頂く。おいしくて三杯を平げた。食事中、畫伯より肥える食べ方の講義を承つた。又玄米飯の炊き方と效能をも承つた。食後なほ雑談して居ると、又閣下のお呼びで枕頭に坐つた。

「平季基は分つちよいや」

「系圖がないので充分には分いもはんが」

「大宰大監ちうは、どんな役目を？あの頃ん大宰府の状態はどげんぢやつちよかいな。綱紀は弛緩して居たかどうかだ。この事は大に島津莊の起原に關係がある。綱紀が弛緩すると官吏などが土地などを自由にするやうになるからなア。丁度、今も同じぢや。之は大宰府の文書を見れば分る筈ぢや」

御質問の連發に參つてしまつた。解答が充分でないので御機嫌が悪くなりかけて心配で堪らぬ。け

れども幸に話は續いて行く。益田さんが御相手をして下さるので都合がよかつた。

「島津家が薩摩迫から大岩田城に來たのは北方からの壓迫に堪えられないで逃げて來たのぢやな。そしておやぢの城を讓つて貰うたんぢやな。大岩田城はどうしてん大岩田ぢやらんぢやならんがなア。俺が居れば同志を連れち大岩田邊を探して探しつけるのぢやがなア。」

島津氏以後六十年になるなア。其間の都城市の政治・經濟・社會の状態を書かんにやらぬなア。

島津莊の事を調べるには近衛家の文書を調べんといかんなア。富山や野邊や宮丸の功績が分らんぢやならんがなア。

安久から南の方には城があいや？あの方が開けちよつどが。なに？六ヶ城がある？六ヶ城は正應寺の坊主どんが行をした處ぢやが。あの上の球磨ん城ぢやな。砂山作太郎ちう男が相良軍の陣の跡ぢやと書いちよつたが熊族の居た所ぢやろなア。とんびう岡は塔の廟岡ぢやなア。あの上に古い石塔があつたちなア。あの石塔の字が讀めるや？讀めんごつなつちよつどなア。

莊園關係の文書はどげな物があいや？兩島津家の文書の外に宮崎の圖書館や鹿兒島の圖書館、近衛家などを調べんといかん。それから帝室との關係を徹底的に調べち見らんといかん。

都城には昔から「來た歴史」はあつどん「出た歴史」はねえどなア。

石原には何かあつたや？うん、石原番所ちうがあつたなア。番人か何か居たなア。あの福島せえ行く道が癖者ちやつどなア。なに？ハイち言ひやいが、どうした理由を？こりや黙つたむんぢや。手



紙も出さん男ぢやが、口も利かん男ぢやなア。筆無性で口無性ちうつぢやなア。塔頂の時でもわざ／＼學者に研究させち、もつと一緒に研究しやうと思ふちよれば、もう手紙を打切つてやらんし、土器の研究をやらうと思ふちよれば「大きな物は送られぬ、小さい物で分る」なんち言つてやつて其儘に打切つてしまふ。あれぢや研究は出来んぢやないか。未だ君の言葉よりも大山どのの言葉が信用出来るよ。大体手紙の上の研究を君の方から打切るからいかんよ。」

時に益田さんが氣の毒になられたと見えて

「その道は間道ぐわんそ」

と口を入れられると閣下は次を話される。

「あれが都城から外海に通ずる抜道ぢやなア。足利義昭も矢張り藤田から福島に逃げちよるなア。そして福島で自殺して居るが、あの時、都城ども賞にあづかつたやうに書いちよるどん、あれは虚言ぢやらう。賞與どころか、やつつけてしまへといふ事であつたに違ひない。けれども北郷家をなくすると東の境目が危くなるもんだから、高城に隠したり、薩摩に隠したりしたんぢやなア。あん時が五代持久の時ぢやなア。都城の危機が二度あるが此時が其一つだ。外の一つは二代義久の時ぢやなア。あの時は北方から壓迫されて薩摩に居られなくなつて都城のおやぢの所に來たのぢや。そして、たつた七十五騎で城を圍まれ、兄弟三人づれで飛び出てやつて見やつたどん、二人の弟は打死し、自分でも負傷して散々な目に遭うたちやろ。けれども八代忠相の時、中郷の田圃はじ

め盆地全体を手に入れて勢力が出来たわけぢやなア。あの忠相ちう人は戦争も上手ぢやつたが、なか／＼人格の高い徳の人ぢやつたなア。

昔の文化移入の通路は、あの石原の道ぢやつたつぢやなア。昔は内海は海賊が横行して危険ぢやつたから大阪あたりから外海の土佐沖を通つて來ると黒潮や風を利用して三日ばかりで九州南部に來る事が出来る。そこで外之浦や福島などの方面にも中央の文化が直接入り込んで、あの邊は早くから文化が進んで居たに違ひない。それで文之のやうな學者も出たわけぢや。此の地方の文化が石原の道を通つて都城に移入したので都城地方も早くから開けて居たのぢや。福島の某神社の祭には隣藩各地から集つて來て大賭場が開かれたといふ事ぢやが、そんな時にも都城地方からは此の道を通つて行つたに違ひない。

移住民の中に學者はないかなア。支那商人の中には頭のよい者が居たなア。そして數理に長けて居たむんぢやかい、どん／＼經濟的に發展を遂げたなア。今でも江夏や西河など支那人の子孫が經濟的に成功して居るなア。この支那商人の指導で取引どんもしたむんぢやろ。都城附近の名産の椎茸など支那人向きには一等ぢやからなア。が移住者の中には學者も武藝者も居らんなア。之は今でもさうぢやが、都城ん奴どま外來者には、あまり、やらせんからなア。」

此時、益田さんが一寸言葉を挟まれる。

「私どんが小さい頃まで子供の額に紅をつけるのが流行しもんでしたがあれは廣東地方の風習で今



でもやつて居いもんすなア。あれども支那人が持つて来た遺習ぐわんそなア。」  
閣下は更に話をつゞけられる。

「天主教の傳來の頃の痕跡が都城あたりにや残つちよ居らんや？何？一つもない？三重町はどげんを？あの町は忠虎さあが豊後から連れち來やつたつちやが。あれが何の役に立つや？荒地開墾のためちやれば農民を連れち來やる筈ぢや。四國から二度までも農民移入をした事もあるから、それなら意味もある。けれども何の必要で農民どむ連れち來るわけがあいや？之は天主教に關係があいごたつどなア。天主教の坊主どもは奴隷賣買をし居つたつちやなア。丁度黒ん坊を奴隷にしたやうに日本人を奴隷にしたんぢや。それは天正十年に信長が死んだが其頃の事ぢやからなア。伊東、大村外四人の大名がローマに使節をやつた頃ぢやなア。天正十五年には秀吉が西征して來て奴隷賣買を禁じて居るからなア。そして三重町の者を連れて來たのは其時ぢやなア。それで之は忠虎が奴隷に賣るつもりで連れて來たのぢやらうなア。之が一番骨の折れない割のよい金もうけぢやからなア。この三重町の事に就ては町の物知りの老人などを集めて研究したら面白い事が分るかも知れんど。大學の史料編纂所に行ち見たい。そして平季基の身を洗ふち見たい。あれは京都から來たか。或は九州の豪族か。又開拓の資本は何處から持つて來たか。勞力は地方で徴發したか。或は連れて來たか。この勞力は太宰府あたりから連れて來たやうに思はるゝなア。あの山の中に住吉神社のやうな海神が祀つてあるのが、おかしいぢやねえや。又穗や小戸のやうな海の傳説があるのも、おかし

いぢやねえや。之は連れて來たのがあの海人族で其の海邊こひしさを満足させるために季基が其の故郷の神々を移したのぢやねえや。そして時々その故郷でするやうにお祭り騒ぎをして彼等の歸心を慰めたと思はれる。之は今北海道に行つて見れば分る。北海道の開拓に内地の各地から移住したのであるが、彼等は各々自分の地方の神々を移して神社を造つて居るのである。之は極めて自然な事である。

都城の盆地の水を吐かせた工事が分つちよいや。近い所ぢや藤崎どん達の觀音瀬工事があるな。あれは運輸交通のために開いたので、保津川や求麻川を視察し、各方面から人を雇うて來て本藩の許可を受けて開いたのぢやがなア。それまで都城の物産は鹿兒島に集めて、それから處分したので、都城は非常な損をして居た。それを之より直接に上方と取引をするやうになつたのぢやな。あの工事を責任を以てやつた藤崎どんが、工事が出來上ると間もなく遠島になつて居るのは、こゝに何か理由がありさうぢやな。この工事のために盆地の水も吐きよくなつた筈ぢや。

大學の編纂所には藤井どんか南崎どんかに案内して貰へばよからう。科は別ぢやつどんなア。志比田は慈悲田、大岩田は大祝田、後久は御給で御給田の略、藤田は當田、益貫は拵拔、徳益は徳楯、田邊は矢張り田邊ぢやな。この理由は知つちよいや。慈悲田は莊園時代の社會事業ぢやな。貧乏人や病人を助ける費用にあてる田ぢや。それから大祝田といふは其の收穫で附近の住民が一緒に集つて大宴會をする費用にあてる田ぢや。御給は役人の給料にあてる田ぢや。當田は田にあてる所



で所當田ともいふ。榊拔の榊は税の意味で榊拔とは免稅地のことぢや。季基の所領を免稅地としたのぢやらうか。徳榊は賦稅地の事ぢや。慈悲田の如き社會事業に従事する者のために設けたものであらう。田邊は田の附近の意味で、あのあたりに田が澤山あつたぢやらう。あの邊に農具製作の村がある筈ぢやがなア。安久、安留、安永などの安の字や、末吉、恒吉等の吉の字などが、どんな意味でついたのかなア。

莊園ちうが其の莊は領家の方に屬し園は伊勢宮に屬して居たのぢや。都城附近にも大園や園田や寺園などいふ所があるなア。之が矢張り伊勢宮に屬して居た筈ぢや。或は神社神社が即ち伊勢宮ぢやから之に屬して居たかも知れん。

頼朝の警察制度ぢやな。あれで、やつつけられたので平家の勢力や事蹟などは皆分らないやうになつてしまつた筈ぢや。平季基の事なども、さうぢやなア。尾平野に御所跡といふ所があるが或は平家と關係があるかも知れん。

蒙古征伐は都城附近から出たに違ひないが書いた物はないかなア。其時は鎌倉からの命令で九州地方の武士は全部出陣しなければならなかつたし、島津久經が出陣して居た事は明かだから、當時の右族であつた富山や宮丸や梅北等が出て居ない筈はないのぢや。出なかつたら直に首ぢやからなア」

此の時益田氏が

「朝鮮征伐出軍者の名簿はありますが……」

と言葉を入れられ、閣下の話は更に續く。

「大体あの盆地は九百年目毎に大事件があるなア。平季基が來たのが九百年前で景行天皇がお出でになつたのが千八百年前になるやうぢやなア。

景行天皇があの盆地の中に来やつた事があいや？なに？傳説ぢや？それは宛にならん。あんな危険な所に入つて來やいむんや。豊臣秀吉が來た時でも盆地の中には一兵も入れて居ないぢやろ？若しあれだけの大軍があの中に入れば忽ち全滅ぢや。

牛諸井に就て考へち見やつたや？牛は珍しい名ぢやなア。牛の峠、牛の驕などいふ地名もあるな。又神社の祭に牛の踊のあるのが珍しいなア。之なども何か關係がはいめかい。牛諸井の諸には諸縣諸麥などの地名があるな。この地方に景行天皇の御子たちが澤山居られたといふ事は當然ぢや。八十人もあつた御子たちぢやが、其頃としては當り前ぢや。今の頭で考へれば、やれ妃がどうの、かうのと考へるけれども、其頃のあんな偉い方になると、そんな事は問題でない。今は一夫一婦といふ事になつて居るが、其頃は一人の婦人などに捉はれて居るやうな者は碌な奴ではなかつたのぢや。其頃あれだけの偉い活動をする人であれば到る處に御子たちがあられた筈ぢや。高城あたりの古墳も其の御子たちに關係があるぢやらう」

そして閣下は一冊の雑誌を取り出され



「この雑誌を見やつたや。之は林が送つて呉れたのぢやが」  
 と言つて渡された。それは史蹟名勝天然紀念物といふ雑誌の第八卷第六號であつた。

「こんな新しい物を読んで頭を作らんといかなア。之に莊園の事なども書いてあるが」と、其箇所を示されてから

「之をあげるといふが、義弟のぢやから遣れぬ。」

あゝ言ふた。言ふた。之で俺も安心して地獄でん極樂でん行きがなる」

と言はれて、関下は大層満足さうにニコ／＼なられた。すつかり言ひ盡されたのであらう。吾々も何となく嬉しくなつた。此時になつて始めて私も上京した甲斐があつたやうな氣になつた。そして辭去しやうとすると、又話が始まる。

「三韓征伐の事に就て立派な資料を提供したコー大王の碑といふのを發見したのは酒匂景信といふ都城の人ぢやな。此人などが立志傳中の人ぢや。此人の父は御屋敷の包丁人で貧乏のために刀を一本さして居たといふ事ぢや。戊辰の役に後隊の一人として仙臺方面に行つた。明治四年に御親兵として四十人上つた中の一人ぢや。其時に外出毎に教師について漢學と算術とを學び、教導團に入り、更に進んで士官學校に入學し、砲兵士官となり、決死隊として滿洲に入り、そしてコー大王の碑を發見したのぢや。惜しい事に肺病で死んでしまつたがなア。夫人が酒匂たねさんぢや。今度死んだ上村中佐の父も立志傳中の一人ぢや。東京に出て海兵團の兵卒になり、解散になつて都城に歸り、

西南役には都城隊に加はつて捕虜となり、それから再び東京に出て士官學校に入り、三期の卒業ぢや、それから進んで大學に入り中止した。近衛少佐から松山に移り、日露戦争に行つて旅順で戦死した。上村家の先祖には殉死した者もあるなア。龍峰寺に墓がある。もう、今度は之でよかろ」

漸く御許しが出たので御側を離れて應接室に歸り、暫く七之助氏や木村執事たちと話して、御邸を辭去したのは早や午后四時であつた。そして益田畫伯の御供をして大森驛より電車に乗り、品川驛に下車し、品川旅館に支拂ひを済ませ、自動車で赤門前に至り、畫伯のお世話で旅館布袋館に落ちつく事になつた。畫伯は夕方まで旅館でお話になつて歸られた。

## 第十八章 上原元帥訪問記 (其二)

六月十四日午前十時 再び上原元帥邸を訪問した。玄關のベルを押すと女中が出て來た。

「木村さんに御目にかゝりたいですが」

「只今、皆不在で、若奥様だけ在宅で御座います」

「関下は一昨日ながいお話でお疲れになられたでせう？」

「少しばかりお疲れで、今日も只今お目覺めになつたばかりで御座います」



「それでは若奥様に、一昨日お伺ひした前田が、明日出發して郷里に歸りますので、挨拶に参りましたと、申上げて下さり」

女中は奥に入つたが、暫らくすると出て来て

「どうぞ、お上り下さいとの事で御座います」

といふので閣下の室に通ると、早や前回と同じ場所に腰かけて居られた。

「此の前は色々とお世話になりました。明日郷里に歸りますから御挨拶に上りました」

「あゝさうや。こゝに掛けなさい」

と言はれて閣下の御膝元近く腰かけた。閣下の御手には前回に差上げて置いた市史の第四編がある。

閣下は之を聞きながら

「之を見ると系圖などが並べてあるやうぢやが、平季基の系圖が出ないといふは不思議ぢやな。あの墓が出る面白いがな。其傍に多くの墓がある筈ぢやから其特徴によつて多くの事柄が明かになるわけぢや。

東鑑を調べるといふ。之は鎌倉幕府の正史ぢやからな。島津家のよりも正確である筈ぢや。それから城の研究ぢやな。之は文献と實物とで調べると、きつと面白い結果を得るぢやる。こゝに莊官言上狀といふのががあるが、あれは何處に傳はつて居たのや？肝付家に傳はつて居たのを

島津

島津家で集めたのだと？どうも文体から考へると合點の行かん處があるやうぢやがな。どうして其の言上狀が肝付家にあるのや？」

「肝付家が肝付郡の辨濟使と三侯院の院司とを兼ねて居たのだからといふ事でぐわんすが」

「さうや。けれども、をかしな所があつど。(之より言上狀の朗讀をされて)『島津御庄者、萬壽年中以無主荒野之地、令開發』と書いてあるが、誰が開發せしめたのか書いてないのが、をかしぢやねえや。恰も島津家でも開發させたかのやうに見せかけて居る。勿論この頃未だ島津氏はないし、誠に滑稽ぢやな。無主荒野之地とあるが誠に此の通りであつたらう」

此の時、女中が洗面器を運んで來たので御顔をお洗ひになつた。そして暫くして二人の若い婦人が朝食を運んで來られた。多分、他家へ嫁いで居られる閣下の令嬢たちであらう。一緒に來た六歳位の坊ちゃんも閣下の御言葉で御孫さんと思はれた。朝食はライスカレーの中に魚や澤庵など諸種の食物を小さく切つて混ぜたもので、一人前ばかりを如何にもおいしさうに取られた。其間に、

「おぢいさんは猫の食べるやうな物を食べるだらう」

などゝ冗談を言つて、お孫さんたちを御笑はせになつた。そして令嬢令孫たちが退席しなると、再び史談が始まつた。

「引用書の研究をやらんといかんや。此の文書は何時、誰が作つたか、どの位信するに足るか、など研究してから採用せんといかんや。島津家の文書位を宛にして居ては駄目ぢや。我田引水で



自分の方に都合のよい事ばかり書いて居るからなア。それから傳説なども其の出来た年代を研究して見ないといかん。久木崎家の系圖によると始は益丸であつて後に宮丸となつて居るなア。すると宮丸の地名に關係ある高千穂宮の傳説も新しいものになりやせんや？あの盆地の底の狭い所に皇居どんがある筈はないからなア。

郷土史を書く時は國史に觸れない方がいゝなア。國史にある事を左右するわけにも行かないから、之を書くにも及ばない事ぢや。墓碑の研究をするといゝ。墓碑の形には時代が分つて居るから益する處が多からう。都城地方の地名の新しい事は考へねばならぬ。此前にも言つたが、大祝田だなア之は一年一度か二度、民衆が集つて大賑ひをやる其の宴會費にあてる田ぢや。慈悲田は貧民や病人を救ふ社會事業の費用にあてる田ぢや。徳樹は此の事業に當る人を優遇して減税して居る田ぢや。柗抜は免税の事ぢや。これらの莊園の政治經濟社會の研究をせねば駄目ぢや。越中富山に徳樹といふ所があるが之などは字まで此の儘用ひて居るのぢや。

頼朝が總追捕使といふものになつたなア。藤田は此の時のものぢや。即ち莊園の武力的保護料として與へる田に當る所ぢや。田に當る所といふ意味で當田と書いたのが後に藤田となつたのぢや。或は所當田と書く。之には畑や山野なども含んで居る。之に關しては文書もある。

後久は御給で役人の給料にあてる田である。之を御給田ともいふのぢや。都城地方につぶきといふものがあつたなア。田の中などに池のやうになつて草などが一杯生えて居

る所があつたが、今は大抵整理して田になつて居るやうぢや。之などは都城が低濕の地であつた證據で、昔はとても人間などが住まれる土地ではなかつたのぢや。近頃は大分水が少なくなつて居る。吾々は七十年の間の變化は知つて居るが、大變な違ひぢや。この疏水工事は知つちよいや？何時の頃か切り開いたのぢやらうが、近頃では百三十年前に藤崎公寛がやいやつたなア。之は交通運搬のためにやつたものぢやが、排水にも非常に役に立つて居る。之によつて都城は直接上方と取引をするやうになつて鹿兒島の搾取を免れるやうになつたのぢやなア。

周圍の山に熊襲が居たゝらうかなア。

あの盆地の成因を調べんといかんなア。之は學者に研究して貰はんといかん。

源平の争は丁度今の政黨の争のやうなものでぢやなア。平季基の一家も之が爲に悲惨な末路に終つたのぢやないかと思はれる。肝付家が飽くまで島津家に抵抗したのも之が爲めではなかつたらうか前に鹿兒島と合同史談會を催した時、中學校の本田君が平氏の勢力に就て話したところ鹿兒島の連中は餘り熱心に聞かなかつたらうが、其の筈ぢやなア。

此の時、女中が私のために晝食を運んで来て、すゝめるので、少し頂いて直に御話の續きを承つた。實は腹を痛めて居て食べられなかつたのである。

「郷土史を書くには獨創的にやらんといかん。他人の粽粕を嘗めて居るやうな事ぢやいかん。裏面からも考へて見るといゝ。徳富蘇峯のは獨創的でないがなア。そして真相を發揮するんぢやなア。



年代を書く時は昭和元年を起點として何年前とすればよからうなア。

申間、福島、外之浦附近の文化に就て調査せんといかんナア。

平季基の人物を研究せんといかんナア。季基が來て開拓するに當つては、どうしても勞力と資本とが要らんぢや。その勞力はどうしたぢらうかなア。此の邊で徴發するには、そんなに人が居たぢらうか。矢張り大宰府附近の農民をつれて來たと思はれるナア。集團移民ぢや。即ち海人族(阿曇族)ぢや。それで住吉神社のやうな山の中に海の神が祀られたり、橿原や小戸などが出來たわけぢや。遙々と故郷を離れて來て居る農民どもは望郷の念に驅られて寂しがつて居たに違ひない。そこで彼等の故郷にあるものを眞似て造つたのが住吉神社や小戸や橿原ぢや。「それ、こゝには小戸もあるぞ、橿原もあるぞ、住吉神社もあるぞ、丁度今日は何月何日のお祭りの日ぢや、さあ一緒に集まれ大にお祭り騒ぎをやらう」といふわけで、大祝田の米を以てお祭り騒ぎをやり、彼等の寂しさを慰めてやつたぢらう。それが眞實の橿原であるなどゝなつたんぢやナア。

都城地方の言葉は、鹿兒島とも又宮崎地方とも違つたものぢやナア。この言葉の中にゲナとかバツテンとか言ふのがあつたが、之は北九州の言葉ぢやナア。よく調べて見たら分るぢやらう。年寄など覺えて居るぢやらう。

此の時、看護婦が脉搏と体温とを計る。脉搏百八、体温三十五度八分。

「今、見ちよいやる通りぢや。戻いやつたない、そげん言ふち呉れやい」

暫らく間を置いて再び史談に移られた。

「平季基から後が明瞭ぢやナア。莊園の中の莊は近衛家のもの、園は伊勢神宮のものといふ事ぢや近衛家の文書の中に莊園に關するものがある筈ぢやが、あつちや?」

「昨日、大學の史料編纂所に参りましたが、近衛家文書があります。近衛家の日記で其中に島津庄に關するものもあります」

「うん、さうや」

「高柳といふ人が編纂官であります、世話してやるといふ事があります」

「さうや、そりやよかつた。六國史どま引くに及ばんぢやナア。安山隆左衛門の日記がうちにあるが御邸に寫してある筈ぢやから見たがよからう。」

山河の變遷を人工と天然の兩方面から見るといふナア。

都城地方に遺物の少い事は早くから開けて居なかつた證據ぢや。人間が居たかも知れんが農作をするやうな進んだ人間ぢやあるまい。

景行天皇時代までが一區劃ぢやナア。その頃まで此の盆地には全く王化は及んで居ない。それで天皇も御はいりになつて居られない。けれども其後に餘威が及んで居たかも知れん。景行天皇には御子様が八十人あられたといふ事ぢやが、それは勿論お一人の腹から御生れになつたのではない。到る處に妃を設けられて御子様を御生ませになつた。それで日向にも澤山御子様が居られたに違ひな



い。天皇の御膝元には二人だけ御残しになつて外は國造或は縣主として御遺はしになつた。牛諸井の先祖なども其一人であらう。此の意味で古墳の研究も必要であるな。景行天皇は姫路の少し東に居られたやうぢやな。そこに大葉枝皇子小葉枝皇子の誕生地といふのがあるな。

應神天皇の淡路の狩の話があるな。そこに牛諸井が出て来るな。牛といふ名は面白い。牛の峠や牛の腰などの地名もあり、神様の祭りに牛の跡が出て来るが、意味がありさうぢや。諸には諸縣諸麥などの地名がある。易幸一山の幸と海の幸の話など都城には關係はないな。庄内の地の起原を明にする必要がある。

景行天皇は餘程偉いお方であつて、明治天皇も「神武天皇のおやりになつた事は出来ないが、景行天皇のおやりになつた事はやつて見たい」と仰せられ、全國に御足跡を御遺しになつたのぢや。土佐沖を通つて上方から日向の南端に來たとすれば此の邊の調査を充分にせにやならんな。この邊から支那あたりとの交易をやつたかも知れんど。都城地方にある椎茸などは支那人の好物ぢやからな。兎に角、都城地方の經濟は支那商人の指導で發展したと見ねばならぬ。

外之浦、福島附近は、こんなわけで文化が開け文之和尙のやうな學者も出て居るわけぢやな。都城地方は文學の發達した所と一般に推されて居るが、昔から學者でも招いて指導して貰つた事はないな。この文化は或は福島地方から自然に流入したものではあるまいかと思はれるな。もう、今度は之でよから」

「ありがたう御座いました。どうぞ御大事におしやつたもんし」

「うん／＼」

そして玄關で若奥様に挨拶して辭去したのは午後三時半であつた。

## 第十九章

### 大岩田城調査報告に對する御返事並に 都城交通史を謹呈したのに對する御禮狀

上原元帥が大岩田城に關して深刻な御意見を持つて居られた事は、上京した先輩たちを通して屢々私に傳言を賜はつた事によつても分るのである。大岩田の地は私の住居より南へ僅に數町、田圃を距て朝夕眺めて居る所であるが、森林で容易に入られさうに見えないので躊躇して居たのであつた。然るに九月十七日の日曜日に潮之口湊君を訪れて史談を交へて居ると偶然にも大岩田城の事に及んだ。そこで早速議一決して實地調査をなすべく足を運ばせ、二人は先づ曾原仁平太氏を訪ねて案内を乞うたところ直に快談され、先づ地圖によつて充分に豫備的研究を遂げ、更に實地に臨んで夕闇せまる頃まで調査したのであつた。そして私共は大なる收穫を得て引上げたが、之によつて元帥の御推測の適中せる事に驚かされたのである。

抑々此の大岩田の臺地たるや、西に大岩田川あり、東に戸通川あり、この二つの川は臺地の北側に



殆んど接して兩方より折れ來り、丁度真中に於て合し、遂に北方に向つて流れ去るのであるが、かやうな天成の防備を有する要害である。そして其の城跡と思はれる一角を見るに、東と北とは約三丈の懸崖をなし西には深さ五間餘幅四間餘の道堀があり、南側は東部十五間位を残して西部四十五間が堀であつて、其堀は深さ三間底幅四間上幅六間半に及んで居る。この南側の掘り残された十五間が即ち城域と臺地との連絡をする所である。そして此の城域は東西約八十間、南北約百三十間、野首の所即ち南側の堀割のある所だけが稍狭くなつて東西六十間位になつて居る。城域の面積約五町歩、森林と思つて居たのは誤まりで大部分は畑であつて平坦である。なほ此の南側の堀割は今まで所謂阿房堀の先端と思はれて居たものであるか、全く之と關係のない事は一見すれば分るのである。序に阿房堀の説明まで加へて置かう。之は昔、今町方面より大岩川まで掘つた用水路であるが、水が乗らずに中止したので阿房堀と呼ぶのであるといふ事である。

さて以上を以て大岩田の臺地の一角に城跡が歴然として残つて居る事は最早や争はれぬ所となつたが、文献には如何なるものがあるか。次に之を掲げて見やう。

### 〔島津國史卷之五〕

曆應元年戊寅七月十一日、島山直顯、福寝清成清種等を遣はして平山式部少輔を日向南郷大和田城に攻む。肝付兼重之黨なり。

二年巳卯、福寝清成清種清道等大和田城を攻む。年をこえて克たず。夏四月十三日之を陥る。

### 〔島津久家々傳〕

延元三年（北朝曆應元年）七月十一日、島山直顯、福寝清成同清種同清道等をして日州南郷大岩田城（或は大和田城といふ今都城なり）を攻めしむ。城主平山式部少輔善く防ぎ陥るゝ能はず。式部少輔は兼重の黨なり。

従來は島津久家々傳に記して居る通り、大岩田城即大和田城で後の丸鶴城であるといふ事になつて居たが、今や鶴丸城は全く別なものとなつたわけである。

以上の研究を終へた私は直に之を元帥に報告した。同時に丁度この頃出版した都城交通史をも謹呈したのであつた。かくて十月上旬元帥より御返事が來た。勿論代筆であるが、之が元帥の下された最後の御書簡であつたのである。此の中に色々と御質問があるが、直に調査して御知らせ申上げたのであつた。次に之を掲げる。

### （本文）

拜啓秋冷之候倍々御清適之段奉賀候。陳者去ル二十七日附御手紙正ニ落掌拜見仕候。

大岩田城趾御探究ノ處 稍相判リ候由、唯宮丸氏ガ其處ニ居リタルヤ否ヤ確實デナイヤウニ存ゼラレ候。北郷屋敷ト稱スル所モ有之候由 然シ是ヲ以テ確實ト申次第ニ有之候ヤ如何。文献ハ素



ヨリ無之候ハンモ其傳説ハ信スベキモノニ候ヤ。否ヤ。不安ニ考ヘ居リ候。是ニ依テ事實ト判斷スル事ハ今一層ノ調査ヲ要スル様ニ考ヘラレ候。元來都城島津家（北郷）薩摩迫ヲ引拂ヒ都城地方ニ引移ラレタト云フ動機ノ何故ナルヤハ議論モ可有之候得共、其結果トシテ今日ノ都城市ガ島津家ノ治所ニ發展セシト云フ事ハ實ニ奇蹟ニシテ都城市史ニハ見逃ス事ノ出來サル處ニ御座候。薩摩迫ヲ引拂ヒ大岩田城ニ居住セル宮丸氏ニ同居サレテ一旦翼ヲ縮メテ而シテ更ニ發展シテ追々ト勢力ヲ回復シ、然ル後ノ竹ノ下ノ城ヲ築イテ或時期ニ都城ト云フ佳名ヲ附ラレ遂ニ是ガ今日ニ傳ツテ居ル事ト見ラレ候。

大岩田城トイフ城ハ別ニアル事ト考ヘラレ候。大岩田城ニ對シテ敵ノ作りシ向城デハナカラウカ？夫レハ今日云フ和田ノ原カラ竹ノ下邊ニアリタル城ニテ大岩田城ニ對シテハ距離モ適當デアルト思ハレ候。是等ガ混合錯雜シテ都城ニ直グ引移ラレタヤウニ有之候得共、當時ノ情勢ハ如何果シテ大岩田城ニ都城ガ翼ヲ納メ次期養原合戦ニハ七十餘騎此ノ大岩田城ヨリ出テ戦ヒシニアラズヤ。然レハ養原合戦ハ吾々ノ信シテ居リシ南ノ方デ戦ツタデハナカラウカ。而シテ大島津勢ト連絡ガトレタ事ト考ヘラレ候。此ノ戦ヒ以後ニ於テ都城勢力モ追々回復シテ竹ノ下ニ城ヲ築クト云フ事ニナツタト想像サレ候。然シ之等ハ史跡ガナキ爲メ矢張り地形ヲ見ナクテハ判明セザル事ニ御座候。自分ノ記憶ヲ辿ツテ見ルト、最初ノ戦ヒデ高城方面ニ退キ、其翌日敵ハ西北方ニ退却シ即チ敵兵ハ自分ノ根據地ノ方ニ壓迫セラレタルモノニ御座候。何レニセヨ、都城島津家ガ薩摩

迫ヲ引揚テ都城地方ニ降テ來タト云フ事ガ今ノ都城市ノ發展トナリ、其ノ治所ガ今日都城市ト云フ事ハ是ハ人爲ト云フカ、天爲ト云フカ、面白イ歴史ト存シ候。

アホー堀モ御發見ノ由、此ノ堀ハ尙ホ研究ノ餘地可有之候間、専門ノ技術者ヲ遣シ、是ガ疏水カ灌漑溝デアルカ研究スル餘地アル故、都城市ノ技術者ヲ遣ハシテ見タラヨカラウト云フ事ハ、財部大將歸郷ノ節大山市長ニ傳言セシ次第ニ御座候。先ハ代筆ヲ以テ右迄申上度如斯御座候。謹言

十月三日

上原勇作

前田 厚様

追伸御編纂ニ係ル都城交通史正ニ受領仕候。御厚禮申上候。

追啓

一大岩田附近ハ要害ナ地故必ズ一構ヘノ城ラシキモノガナクテハナラヌト上原ガ注意ヲ惹起セシハ木ノ前村（城ノ前）ノ昔カラノ存在デアル。

御發見ノ大岩田城ハ木ノ前ヨリ何程位ノ距離ニアルヤ、御序ノ節御知ラセ下サレ度

二トンビ岡ノ御調査モ追々御運ビノ由、之ハ益田君ト御相談ノ上御進メ下サレ度。今月末ニハ未タ草枯セヌ故、測量ノ展望ガキカヌト思フ。東京方面ハ草ガ枯レ切ツテ葉ガ落チタ方ガ良シイ此ノトンビ岡ノ大工事ハ餘リ古イ事デハナイカト思フ。其邊ノ事ハ能ク益田君ガ承知シテ居ル三御送り下サレシ交通史ハ一寸拜見シタルモ、最後ノ湖水ノトドロノ切開キノ始末ハ御申述ノ通



リ出来、其處分ハアソナニ好都合ニ終ツタノデスカ。都城ノ安山松巖ノ筆記ニヨルト總奉行ノ北郷某、藤崎等ヲ始メトシテ大概ノ巨頭連ハ遠島ニ處セラレタ事ガ書イテアルガ、言ヲ換ヘテ云ヘハ好都合デ終結シテ御褒美ガ行ハレタノミデアツタデセウカ。疑ツテ居ル次第デス。

## 第二十章 元帥最後の關心事の一なる トンビ岡附近の研究

上原元帥が最後の關心事の一はトンビ岡の研究であつた。之は六月、私が元帥を訪問申上げて後、間もなく始まつた事で、益田玉城畫伯と三人がより進めて行つたものである。私から元帥並に畫伯に差上げた書面は手許にないから茲に載せる事が出来ないが、元帥と畫伯の御書面だけを見れば前後の關係によつて自ら推測し得られると思ふ。こゝに其書簡及び私が最後に元帥に差上げた研究物を並べて置く事にする。なほトンビ岡調査報告並に鳥瞰圖は丁度折よく御歸省された財部大將に御頼みして差上げたのである。

### (其一) 畫伯より私への御書簡

前田 厚様 二十七日(六月)

益田 玉城

拜呈先般御出京のせつは失禮致しました。無事御歸郷之由安心致しました。

暑中まことに恐れ入りますが、可成早く願ひ度ひのですが、正應寺のトンビ丘頂上に御登り下され頂上の墓石の實体を詳細に寫生、文字あらばそれを寫し下され、可成なら石摺りにして下されれば結構です。御承知の通り、上原閣下は常にトンビ丘の事に言及され、昨今では私も互に説を出し合ひ改めて研究を始めました。然し、實体を知らずに研究ですから、少々迂遠の感が致します。閣下がたしかなる中に、一日も早く實体につきて取調べ、安心させて上げたい希望です。貴臺も其點よく御了解下され、至急御登山の程懇願致します。史蹟調査に關しての企ですから諸費用等は市へ御相談御差支なき事と思ひます。寫真もとりて下さらば尙結構です。今日は何よりもこんな事が閣下に對しての大なる慰問ともなる次第です。一日千秋の思ひで貴臺の詳細なる調査報告を期待致して居ります。

### (其二) 畫伯より私への御書面

拜呈御手紙寫真御端書正に難有拜見致しました。まことに御苦勞様でした。記文と寫真とによつて幼時の記憶がまざくと呼び起され、四十年前の小松が轟々たる大木になり、すゝきなと生ひしげり、人蹟もと絶えて居る由、感慨深く思はれます。とに角、早速上原邸へ御届け致しました。之にてトンビ丘の解決がつかや否やは言明出来ませんが、近日面會の上相當話の花が咲くことと思ひま



す。  
雨中トンビ丘の征服は恰も桶峽間の奇襲の如く、流石の上原將軍も、此元氣には満足のことゝ思ひます。

碑の思ひしよりも新しいのに一寸失望致しましたが、山の神の供養の爲めなどに建てたものでせうね。トンビ丘の名とは關係がなさそうですね。文字は鮫島仁右門である事が寫真で分りました。嶋は嶋とかいてありますね。嶋は嶋の草書ですね。

碑の前に貴臺の立たれたことは、まことによい事と思ひます。物象の前に人が立ちて居ると太さの見當がついてよろしいのです。此後も寫真撮影のせつは必ず人を其中に入れる様にして欲しいと思ひます。

トンビ丘登りの費用は市史編纂の一端として市から費用が出ますか。如何。若し市から出ない様でしたら其旨私迄御知らせ下さいませんか。

先は不取敢御禮旁如斯申上げます。

七月十三日

益田玉城

前田厚様

此後の御通信等は御互の間は輕便なる万年筆で致しませう。毛筆では大變ですから。

### (其三) 元帥より畫伯への御書面

拜啓酷暑之砌り倍々御健康の事と存じ上候。扱て此冬の間は再度前田君をしてトンビニューガ岡及び其附近の研究が出来る様に候へば其後の上原は御會見後の思ひつきも有之候間、更に一度御會見願度考へ居り候。

度々恐入候へ共、今冬迄の間に御暇の時御來車願上度候。草々不備。

八月八日

上原勇作代筆

益田玉城様

### (其四) 畫伯より私への御書面

前田厚様 八月十一日

益田玉城

御變りもありませんか。此頃の暑さに。御端書難有拜見致しました。トンビ丘に就きては上原閣下は迎も熱心で此真相が分らぬ内は死なれないと云ふ意氣込みに見受けまます。

トンビ丘の努力寫真は閣下は大喜びでしたが、前田君の意見と研究が少しも報告されませんでしたので、稍々あきたらぬ様でした。然し、あの寫真の効果は頗る甚大。閣下曰く、「此寫真によりて今迄の想像と考察が根底からひつくりかへされ、トンビ丘は一つの怪物となつた。郷土史上離すこ



との出来ぬ研究物である。前田君の努力を期待する」との事でしたが、尙閣下は、更にトンビ丘から正應寺に亘る山系の鳥瞰圖にバロメータで大体の高さや距離を計りたものが一枚欲しいものであると熱望されて居ます。古きを尋ねる事を都城人など或一部には不可思議に思ふて居る人もあるかも知れませぬが、御承知の通り、他縣などでは町史などにも大變な力瘡を入れて居ります。熊本も征西將軍、加治木の島津義弘其他何々等、東京の有名な學者へ依頼して編纂して居る位です。歴史を正すことは郷土の精神向上の一助となり、愛國の基本であるのです。それで、あなたからも如上の意義ある説明を、時に應じお話を願ひます。

都城は餘りに物質主義に傾いて居る所ですから、閣下の郷土史に熱心なることを不解に思ふて居る人があるかも知れませんが、順序ながら一寸申しそへておきます。

山下清一君著の都城一覽に記されたるトンビ丘の考察も一寸面白いと思ひます。鳥見靈時に結びつけて居ります。一讀を乞ふ。圖書館にあるでせう。

閣下の説では六ヶ城は城でなく正應寺に關係ある遺跡であらう。水のない所は絶対に城は成立たぬ相です。若し用水の溝跡でも見付けたら城として證明が出来るとの事でした。

閣下も御承知の容態ですから此冬迄とは少々長過ぎますから可成研究は早い方がよいと思ひます。近ければ私も一緒に御手傳ひして實相を究めるのですがね。今は只貴臺に願ひするより外ないのです。御報告願ひます。なつちよらん事でもよろしいのです。閣下は非常に喜ばれます。

(なほ外に一枚、トンビ岡の鳥瞰圖の略圖と書き方の説明の書いたのがあつたが紛失した——編者)

### (其五) 畫伯より私への御書面

拜復御端書難有拜見。トンビ丘が大分問題となつて來ましたが、此度は規模を大きくして徹底的に御調査下さること、西藏探險にも比してまことに壯絶、近ければ小生もついでに行き度いと思ひます。上原閣下も、おれが今少し若けと行くどんなど云つて居られました。測量及繪畫の出来るものに丸田省吾君あり、只今遊んで居りますから、こんな人を引き出すことも人物經濟上結構です。丸田君はもと陸軍築城本部技手で旅順元山津澎湖島砲臺築城等に關係、經驗あり、六ヶ城等の城趾に關する測量等には適材かも知れませぬ。一寸御參考迄に申添へて置きます。歴史による日本精神振興は固よりですが、研究の結果トンビ丘が偉大なる史蹟であると云ふことになれば、都城市外に一大名所が殖へる譯であるから、生きて居る内に出来るだけ調べやうよと閣下が一寸洩らされたことを見ると、矢張り名所の乏しき郷土に大名所を出現させんとする郷土愛のあらはれであることが首肯されます。閣下はトンビ丘の寫眞を見てから考察方針一變、急轉直下、時代を下ろして足利末期のものとして研究をつけて居られます。其該博は眞に驚くべく一介の武辨の到底及ぶ所ではありませんね。

兎に角、此度の大學探險は日永き病床の閣下如何ばかり待ち焦れなされる事とせう。御奮發を御願ひ



致します。

山下清一君は鳥見陵にあてはめて居りますが、古代に目標を置いての研究も又捨て難き點もありま  
すね。東京の日本新聞に山下君はトンビ丘の説を發表しました。

先づ一寸右迄。

八月二十六日

益 田 玉 城

前 田 厚 様

### (其の六) トンビ岡調査報告

——鳥瞰圖と共に最後に元帥に贈りたる——

(調査者 前 田)

昭和八年九月卅日、少曇後晴、何れの自動車も車体検査のため出ないとの事で、丸田省吾氏と土  
木課員川平君との二人と共に、徒歩で安久に向つて出發したのは、午前八時半であつた。途は早鈴の  
大通を鎌牟田に出で、東南方、藤田に向つて直往し、安久の信用組合に安藤氏を訪ふ。そして山の案  
内を乞うて見ると、既に豊丸市収入役の一行と尾平野行の先約ありとの事で、中郷村役場に村長永井  
藤三氏を訪ひ、誰か案内者と願ふたところ、自分で案内してやるとの事で、大に力を得て役場を立  
ち出でた。永井村長は自轉車で先に歸つて居られたので、三人は後より其家に立ち寄つた。村長の家



(其の六) トンビ岡調査報告

——鳥瞰圖と共に最後に元帥に贈りたる——

(調査者 前 田)

昭和八年九月卅日、少曇後晴、何れの自動車も車体検査のため出ないとの事で、丸田省吾氏と土木課員川平君との二人と共に、徒歩で安久に向つて出發したのは、午前八時半であつた。途は早鈴の大通を鎌牟田に出で、東南方、藤田に向つて直往し、安久の信用組合に安藤氏を訪ふ。そして山の案内を乞うて見ると、既に豊丸市収入役の一行と尾平野行の先約ありとの事で、中郷村役場に村長永井藤三氏を訪ひ、誰か案内者と願ふたところ、自分で案内してやるとの事で、大に力を得て役場を立ち出でた。永井村長は自轉車で先に歸つて居られたので、三人は後より其家に立ち寄つた。村長の家

トントウ鳥瞰圖





は正應寺部落で最も山に近い所にある。舊時よりの素封家で、家の構造など舊式ではあるが、總てが何となく大きく出来て居るので、氣がゆつたりと落ちつく。夫人からお茶など頂いて、一行四人は一時頃やうやく腰をあげた。門を出て少し東に行くと、もう第一の坂だ。こゝが仁王門の跡だといふ。之より、正應寺の跡、住僧の墓地、山王宮趾や薬師堂跡を探り、急坂を攀ちて山之神に至り、山の脊を逆戻りしてトンビ岡の山頂を究む。山の神より山頂に至る間、茅しげりて人よりも高く、加ふるにいばらや雑木等その間にまじりて、歩行頗る困難した。頂上にて晝食を取る。時に午后一時。之より西南に向つて道なき雑木林の急斜面を道まで下り、更に道のまゝ下りて、球磨の陣、六ヶ城、助市ヶ城、池平城、供養塔、池平池、長谷の池、長谷観音の跡など調査しをはり、永井村長宅に落ちついたのは宵闇せまる午後六時であつた。それより酒肴の饗應を受け、山海の珍味に疲を忘れ、夜半自動車を驅つて歸路についた。次に各主要地點に關する調査の結果を列記する。なほ此外に、正應寺附近の谷間や山中には十二僧坊などが點在して居たのである事を附記して置く。

#### 一 正應寺跡

位置 中郷村大字安久字正應寺

面積 東西六十米 南北四十米 二、四〇〇平方米

標高 二三二米

山緒 仁安元年(一八二六)今より七百六十八年前、天臺座主二品親王の命により、禪慶和尚及び長



井辨濟使等が、醫王、山王並に藥師尊像を負ひ奉つて當國に下向し、此山に安置して當寺を開き、醫王山知足院正應寺と號し、中頃眞言宗に代り、慶應三年廢寺となつたものである。舊時の寺域は更に廣大で寺屋は次の通りである。

- 一 護摩堂 六敷五間三尺 礎 板敷板壁茅葺切戸六間内一間は實應寄附 疊七疊宥政上人寄附
  - 一 書院 七敷五間 礎 板敷 茅葺 二方縁 半障子六間 襖障子一間半 戸壹間 切戸七間は實應寄附 疊二十六疊は宥受寄附
  - 一 知足院額面藤原久龍書
  - 一 客殿 十敷七間 三方縁 礎 板敷 茅葺 半障子七間 疊三十四疊 板障子宥受寄附
  - 一 中庫裏 六敷四間三尺 礎 板壁 茅葺 切戸三間は實應寄附
  - 一 客寮 六敷三間 二方縁 板敷板壁 茅葺 切戸五間は實應寄附
  - 一 部屋 四敷四間
  - 一 臺所 六敷五間 礎 板敷板壁 茅葺
  - 一 藏 四敷三間 礎 板敷土壁
  - 一 物置 三敷三間 切戸一間は實應寄附
  - 一 大門 礎 小板葺 上屋有 左右板屏六間
- 右虎之彫物木朽古は藥師堂の後に宥之節の古門にて此處に相移候門と申傳候

現狀 後に山を負ひ前に水田を控へ、今は竹林となつて居るが、土地の高低によりなほ寺屋庭園の跡など探る事が出来る。後の崖より岩清水が湧き出で、御茶の水となりしといふ痕跡までも止めて、昔をしのばしめて居る。昔の寺域は道路より崖までの間であつて今の水田をも含み、寺門は道に面して居たのである。

## 二 住僧の墓地

位置 同所 藥師堂道の南側、寺の大門の前に堂

面積 八〇〇平方米

標高 二三〇米

由緒 正應寺住僧にして當寺に於て死亡せし者の墓地である。禪慶和尚以下宥政上人等二十餘基が並んで居る。昔は此處の路傍に觀音堂があつた。廢寺の後は顧る者もなく、名僧智識の墓碑も雜木林の中に姿を没し、只、大なる五輪塔のみが人目について居たが、大正八年、時の安久小學校長河野一平氏は區民と謀りて之を開き、附近の山中に散在せる大小の墓まで之を集め、大正九年三月廿七日、皇太子殿下行啓記念として石碑を建てたのである。

現狀 石塔には五輪塔及び其變形と思はれるもの、自然石、佛像一体、二体或は三体を浮彫にせるものなどが數基つゝ混在して居る。宥政上人の供養塔は、高さ九尺七寸、周圍一丈八寸の一大五輪大塔である。彫刻の佛像は多少破損はして居るけれども、割合に原型を保つて居る。文字も古くて明瞭



なのが多い。

猶、宥政上人は北郷周防守常久の次男であつて、出家して文鏡防宥政と號し、洛陽本寺嵯峨法輪寺恭長僧正の弟子となり、慶長の頃より當寺十五世の住職となり、中興開山と稱せられるに至つたものである。或は此時より眞言宗となつたのではあるまいかとも言はれて居る。

三 山王宮跡

位置 同所藥師堂道の北側、寺門より東へ一四〇米。

面積 八平方米

標高 二四五米

由緒 山王は仁安元年に禪慶和尚開山の折に、醫王藥師の二休と共に負ひ奉つて來たのであつて、山王宮は舊時に於て相當の設備がしてあつた。即ち次の如くである。けれども廢寺と共に廢滅に歸したのである。

一 山王宮御寶殿 四敷三間 礎 板葺 板敷板壁 前一間縁 左右三尺縁上屋六敷五間 礎茅葺

一同舞殿 四敷三間 礎 板敷板壁 茅葺

一同拜殿 四敷三間 礎 板敷板壁 茅葺

一 御供所 四敷二間 礎 板壁 茅葺

現狀 山王宮の跡は、今全く絶えて、少しばかりの高地を残して宮のありし事を傳へるのみで、殆

んど品になつて居る。

四 藥師堂跡

位置 同所 山王宮跡より東方二〇〇米

面積 四〇平方米

標高 二六〇米

山緒 正應寺の本尊藥師如來が安置してあつた所である。抑々此の藥師如來は傳教大師の御作であつて、昔、大師が入唐の時、赤梅檀の靈木を彼地に得て、三体の藥師を作り、一体は帝都の鬼門延曆寺に、一体は越前國榮山寺に、一体は當山に置いたので、即ち此の藥師尊像がそれである。かくの如き至寶も、廢佛の厄に遭うて燒棄されたのである。此の藥師堂並に附近の設備は次の如くである。なほ藥師尊像に就ては秘佛として記してない。

一 藥師堂 三間四面 中之間一丈間 四方四尺縁 丸柱 礎 板敷板壁 圖師一間方 佛壇廣左右

一丈前後七尺

一 額瑠璃殿藤原久龍書

一 右堂箱 四敷三間 板壁 前三間三尺縁

一 藥師堂脇天神社 一間方板社 上屋有

八月廿五日祭

格護 正應寺



一同所荒神

格護 正應寺

一同所早馬天神本地十一面觀音格護 正應寺

現狀 正應寺よりトンビ岡に登る道が堂の前庭を斜に切つて居る堂の跡は杉林になつて居て、附近よりも少し高くなつて居り、其上に礎石が二三残つて居る。

五山之神

位置 薬師堂より登ること一六二〇米、坂がつきて道が平坦となる所、道の北側にある。

面積 四平方米

標高 五三五米

山緒 詳ならず

現狀 大木の下にある小さい祠である。大きは一尺五寸四方高さ一尺五寸位で板敷板壁板葺である中には丸い石が入れてある。この所よりトンビ岡の方に逆戻りする幅一尺ばかりの野路がある。今は茅に覆はれて通られないけれども、深く凹んで居るので少し辛抱すれば行かれる。トンビ岡に登るにはこの野路を行くのが最も便利である。

六 トンビ岡頂上

位置 山之神より西北へ山之脊を行く事二二〇米

面積 四〇平方米

標高 五四八米

山緒 詳ならずけれども、昔より野岡であつて、上の平坦な所で神を祀り、大太鼓踊など奉納したものだといふ。

現狀 茂つた茅で全部おほはれ、其間に三本ばかりの少々大きな松があり、外に小松がまばらに生えて居る。頂上の平坦な所の真中より少し東に偏して一基の石片がある。形は堂屋に似て少しく細工を加へ中は空洞である。石材を組合せて造つたもので、高さ三尺ばかり「奉寄進天明六年乙丑三月廿八日鮫島住右衛門」と刻んである。そして此の石塔の方向は都城中學校即ち霧島の方を向いて居る。この頂上より下の方へ前には路があつたといふが今は全く其のあとが消えて探す事も出来ない。

七 球磨の城(球磨の陣とも云ふ)

位置 山之神より下ること一六一〇米、薬師堂の北上に當る。

面積 三八〇〇平方米

標高 三二〇米

由緒 詳ならず。或は球磨の相良勢が構へた所であるとも傳へて居るが、名稱より察して、さうであるかも知れない。もし然りとすれば、正平十四年か、天授か應永の頃であらう。

【求麻外史卷一の七】

正平十四年北朝延文四年 巳亥冬十一月。幕府足利義詮 賜教書兵部大輔花房。兵部大輔未詳。何人。歴代參考以爲斯波義重。 授公日向北朝領家職。公乃遣出中公



長守都城。

此の時、田中公長は何處に居て此地方を守つたか明記したものがない。或は之かとも思はれる。又天授二年より三年にかけて今川氏に従ひ都城を圍んだ時に居た所とも思はれるが、それにしても餘りに遠すぎる。其時には姫木城に居たとも言はれ、又、小笹の谷の球磨の陣に居たとも思はれる。けれども前に居た事があるとすれば之を利用したかも知れない。又、應永元年、今川貞兼に屬して梶山に戦つた頃、居たかも知れない。これらは名稱より推して考へたゞけであつて、別に確證があるわけでもないが、たゞ、第一の築城と見るのを以て最も適切とする事には多くの理由を持つて居る。けれども詳説は後日に譲る。

印狀 この球磨の陣は諸所にあるところの所謂クマンチンのやうな簡單なものではない。丸數三個を有し、其間は深さ五米以上の堀を以て割し、麓に面する方は堀の内側に高土手を設け、山に連る方面は二重堀を造るなど頗る進んだ入念の巨城である。其形式は稍々梶山城に類似して居るより察するに、或は同時代のものであらう。

#### 八 六 ケ 城 (ロクカンジャウ)

位置 球磨城より下ること二七〇米

面積 東西五〇米 南北一五米 七五〇平方米

標高 三〇五米 道路より一〇米高し

由緒 當城は北郷資知の編せる島津久家々傳に所謂六ヶ村城であらうと思はれる。先づ次に其本文を掲げる。

天文二年五月十四日、忠相、家老山内豊前守義清に命じて城を六ヶ村に築く。島津忠朝、新納忠勝、北原久兼、人を遣り、役を助く。十月一日、伊東氏高城、山之口の兵を以て六ヶ村城に迫り、伏を置き戦を挑む。我兵、城を出で撃ちて之を斥く。

蓋し、此の頃、忠相、猶未だ強大ならず。單に安永、都城の二城を有するに過ぎない。實は此時、曾於郡城を手中に入れて居たけれども遠くて都城の支柱としては役に立たない。そこで伊東氏の軍も本野原に肉迫して來た事があつた。こゝに於て六ヶ村城を此地に築いたのは誠に當然の事で、之より後、伊東軍は勿論、再び郡城に肉迫する敵はなかつたのである。六ヶ村に就て庄内地理志には別の説を立て、居るけれども適切でないやうである。次に之を掲げて参考に供しやう。

六ヶ城 長谷東嶺に在。遠見殊勝之景地要害也とも、富別府高嶺より眼下なれば、又可然古迹。號六ヶ城。境に求摩陣と云。肥後求摩勢所屯歟。或は文明兵亂之時、薩摩手勢所屯。

現狀 地理志には舊時の状態を畫いて居るが、之によると、上はまるく平坦で、周圍は環狀の段々になつて居り、すべて六段である。けれども東側の山に面する方即ち裏側は一つの斜面で段々になつて居なかつたかも知れん。現狀より推してかやうに思はれる。さて其の現狀は東側即ち裏側は急斜面で頂上まで達して居るが、西南北の三面、殊に西の方に向つて三段になつて居る。多分、造林など



のために崩したのだらう。今は全部松林である。

### 九 助市が城

位置 六ヶ城より下ること一六〇米

面積 東西一五米 南北八米 八〇平方米

標高 二八〇米 道路より六米

由緒 詳ならず。六ヶ城に附屬して助市なる者が築いたのであらうか。

現状 頂上平坦にして雑木など生え、鵜飼が地面に密生して居る。

### 十 池平城

位置 助市が城より下ること四四〇米

面積 五一〇平方米

標高 二二八米 道よりの高さ二〇米

由緒 史上に最も古く現はれるのは、弘和元年（北朝永和元年）である。

### 【島津國史卷七】

永徳元年辛酉七月四日。今川滿範取<sub>リ</sub>末吉城<sub>ヲ</sub>。置<sub>キ</sub>兵<sub>ヲ</sub>戍<sub>ル</sub>之<sub>ヲ</sub>。而與<sub>ニ</sub>岩河城<sub>ヲ</sub>相應<sub>ス</sub>。以<sub>テ</sub>絶<sub>リ</sub>志布志宮古城之道<sub>ヲ</sub>。七日。取<sub>リ</sub>池平<sub>ヲ</sub>。使<sub>シ</sub>土持氏<sub>ヲ</sub>守<sub>ル</sub>之<sub>ヲ</sub>。十七日。進<sub>リ</sub>向<sub>リ</sub>都城<sub>ヲ</sub>。復<sub>シ</sub>刈<sub>ル</sub>早稻<sub>ヲ</sub>。十八日。還<sub>ル</sub>軍<sub>ヲ</sub>。北郷誼久出<sub>シ</sub>輕卒<sub>ヲ</sub>追<sub>ヒ</sub>擊<sub>ス</sub>之<sub>ヲ</sub>。不<sub>レ</sub>克<sub>ス</sub>。

現状 前に池平池あり、後に丸善池あり、谷川亦麓を流れ、要害の地であり、全山林である。

### 十一 池平の供養塔

位置 池平城より西北一一〇米

標高 二二〇米

山緒 詳ならず。察するに老松あるが故に之を立てたのでもあらうか。老松にも何らかの意味があるのかも知れない。

現状 丘陵の上に一大老松がある。幹の周圍一丈二尺に及び、惜しい事に枝を多く切られて居る。この松の根元に高さ二尺位で六寸角程の石塔があり

□□大権現供養

と彫りつけてある。又側面に女の名が刻んであるばかりで他に何のしるしもない。大して古いものでもないが新しくもない。

### 十二 池平池

位置 供養塔より一五〇米

面積 二六、八〇〇平方米

標高 一九五米

山緒 池平の名は史上に弘和元年はじめて之を見ること既述の如くであるから、それ以前より此池



があつた事は分る。之に堤防を築いて溜池としたのは何時であるか、之は分らない。古い事であらう。

現狀 溜池として灌漑用に供して居ると共に養魚池として利用して居る。

十三 長谷の池

位置 池平池より山を越えて西南へ六五〇米

面積 七一〇〇平方米

標高 一八四米

山緒 池に就ては別に記したものが無い。長谷の名は正安年間、長谷観音を建て、から起つたものであらう。土地の人はハセンタンノ池と呼んで居る。

現狀 溜池として灌漑用に供すると共に近來養魚池として利用して居る事は池平池と同様である。

十四 長谷観音跡

位置 長谷池より東方一〇〇米

標高 二〇〇米

山緒 長谷観音は鎌倉時代の後期に創建し、維新前まで續いてあつたのである。

(庄内地理志)

長谷観音

長谷観音は古來より有之。正安元年己亥十二顯容と申僧勸進ニ而再興。夫より二百二十餘年を経廢堂と成。參詣之道斷候處、永正十七年高野山千手院住僧淨觀法師諸國編歴し、當地罷下、右佛閣大和國長谷寺を象り十一面観音を安置爲有之様子に見請候へども、悉廢壞に付淨觀再營之志を起し、村里勸進有之候節、御當家七代數久様御子忠相様被聞召、御願主にて御再興有之候。

- 一堂四間方 四方三尺縁 茅葺 礎 板壁天井
- 一十一面観音 木立像 長五尺 惣体丸木作
- 一脇士四天王

脇士銘ニ

長谷寺観音菩薩脇士二尊〇

正保三天丙戌正月吉辰

大願主 正應寺宥政上人

佛師隅州宮内三〇院光秀

大工中滿作兵衛

現狀 杉林になつて居る。池を隔て、此附近を眺めると、誠に幽邃の佳境で、其の谷間の上に六ヶ城趾が聳えて居り、一層雅致を加へて居る。



## 後記

この報告書は別紙鳥瞰圖を参照しつゝ読んで始めてよく分るであらう。丸田省吾氏は此日調査されたのみならず、更に二回に亘つて梅北安久等に赴かれ實地を望見して畫かれたのである事を附記して置く。

## (其の七) 畫伯より私への御端書

拜呈トンビ丘の大々的研究、誠に御苦勞様でした。報告書正ニ拜受、難有御座りました。何れその内、鳥瞰圖なども拜見の上、元帥閣下とも意見の交換を致し度いと思ふて居ります。元帥閣下は此冬迄にはと申して居られたのが意外に早く調査が出来て閣下も大喜びであつた事と察します。詳細は後日に申し上げます。

今は只御禮言のみ申上げておきます。

(十月十五日)

## (其の八) 畫伯より私への御端書

拜呈御編纂の都史四五六正に拜受致しました。難有御禮申上げます。トンビ丘は去る一日午後を期して元帥邸に於て研究の事に相成り居りしに、閣下昨今御疲勞の容態にて俄かに中止、他日又日を期して致すことになつて居ります。トンビ丘は御報告書により疑問の點等あるやに承はつて

居ります。私は今の所、別に疑問を持つて居りませぬ。先日現代隅田川風景のプロマイト一枚お贈りして置きました。御笑覽下さつた事と思ひます。  
(十一月二日)

## 第二十一章 結言

以上に述べた御書簡並に御談話の外に、猶多くの御傳言を頂いたのである。其中でも一昨年山田梯一氏が歸省された時、公會堂別館に於て市内學校關係者に送られた御傳言は悉く郷土史に關するものであつて、實は私に對して言はれたと解してもいゝ程のものであつた。「都城の歴史を修める事は其の顔を洗ふ事である。よく洗つて都城の美しい顔を世に出さねばならぬ」と冒頭して傳へられた内容は大休早や御書面や御談話の中で承つた中に含んで居るから重ねて記載しないけれども、愛郷の至情あふるゝものであつた。

さて元帥が薨去されて以來、私は夜なぐべんを執つて此の編を書いて來たのであるが、私は胸中常に涙を呑んで居たのである。殊に残念で堪らない二つの事があるが、其の一つは私が元帥に對して責任を果さなかつた一事であり、他の一つは元帥が或事柄を未完成のまま逝かれた一事である。先づ前者から述べやう。



昭和五年十月廿日、水間旅館に於て十時間に亘る史談を承つた後で、元帥は「もう、俺もながうは生きないから、はめつけて早く作り上げて呉れやい」といふやうな事を言われた時、私は

「はさ」

と言つて約束して居る。然るに、それから約三年を経て昭和八年六月十一日元帥邸に向つた時

「之から、もつと、はめつけます」

といふと

「今づいの事ぢやつた」

と寂しさうに言はれたが、水間旅館に於ける最後の言葉と思ひ合せて、やるせない氣持をどうする事も出来なかつた。この氣持は今もなほ同じである。少しでも早く完成して御靈前に供へなければならぬといふ念が絶えず胸中を往來して居るのである。

かやうに元帥は御生前に郷土史の完成が間に合はなかつた事に對して御満足にならなかつたけれども、どうしても完成させずには置かないといふ御親切は最後まで御變りにならなかつた。私が二度目に向つた時に元帥は、「一昨日、財部さんの來て呉れやつたかい、郷土史の事を頼んで置いたが、引受けて呉れやつたぢ、之から大將に相談して世話をして貰れやい」と言はれた。何といふ有難い事であらう。私は唯涙あるのみだ。言ふべき言葉を知らぬ。

次に元帥が未完成で逝かれた一時といふは、トンビ岡の研究である。殊に岡の麓にある教多い城趾に就ては必ずや最後の斷案に到達させて頂く事が出来るかと私に期待申上げて居たのであつた。そして十一月一日午後を期して益田畫伯と共に研究して頂く御豫定になつて居たといふ事は畫伯の御書面に記されてある通りであるが、天なるかな、元帥は此頃より御容態が悪化し、一週間後の八日午後七時四十五分、遂に此世を去られたのであつた。残念と言ふ言葉は此のやうな時のために作られたのであるまいか。私は今に残念で堪らないのである。

思へば元帥から始めて御書面を頂いてから薨去せられるまで三年八箇月、餘り長い年月でもなければ、丁度専門學校の年數位にしか當らないけれども其間如何なる教授よりも熱心に親切に指導し鞭撻して下されたのであつた。軍人より見れば元帥大將であらうけれども、私より見れば親切な先生であつた。そして此の間に郷土並に郷土史に關して教へられた事は悉く郷土の者全体に對する元帥の遺言であつたのである。吾等は元帥の火の如き遺言を胸に秘めて郷土の歴史をいやが上にも美しくするやうに心がけねばならぬ。



圖書種別

昭和九年三月現在

種別	備付	巡回文庫	上原文庫	計	種別	備付	巡回文庫	上原文庫	計
郷土史	201	3	64	268	交通	44	2	101	147
歴史	999	420	956	2375	算術	148	6	96	250
地理	345	100	455	850	物理	170	5	39	210
神書	55	8	47	100	博物	156	3	59	214
宗教	255	3	44	302	工物	96	8	37	241
哲學	56	143	206	405	科學	203	7	82	311
社會	895	769	47	1651	醫科	1654	938	674	3266
教育	871	553	219	1643	文學	227	11	27	305
圖書	46	1	10	57	藝術	177	8	73	258
國家法	405	139	69	613	藥學	216	7	17	240
經濟財政	185	33	83	301	一般	283	5	21	309
武事	133	69	67	279	少年	563	6	22	591
統計	263	0	7	339	計	9598	373	5416	15387
遠業	582	299	168	1049					

閱覽人員並冊數調

自八年一月至全十二月

部門別	人員	冊數	夜間	冊數	館外	延冊數	人員	冊數
宗教神書	131	157	56	70	904	1019	1093	1246
哲學	296	388	110	144	1569	1833	1985	2354
教育	1331	1744	809	1018	10749	12814	12880	23960
論理學	5	7	4	4	111	111	31	33
論理學	15	18	7	7	386	408	108	133
心理學	315	405	135	156	1601	1639	1852	2100
國家法	1	1	1	2	1	1	2	3
政治	261	233	90	110	1350	1643	1601	1986
經濟財政	473	558	216	245	2719	3070	3508	3873
社會	357	433	133	137	2118	2414	2588	5483
歷史	464	505	160	171	1924	2261	2548	3286
傳記	126	198	29	35	972	2258	1127	3191
郷土資料	559	630	185	198	2073	2228	2817	3046
地誌	2	2	1	1	198	198	3	3
紀行風俗	2	2	1	1	198	198	3	3



月	官公吏	教育家	自由業	農業	工業	商業	學生	無職	其他	兒童	計
四月		六		一七						一九五	三七一
五月		一六		二五九	八九		101		六〇	三三七	1,050
六月		一六		二五九	九六		10	一五		一六五	三八二
七月		二		二五九	九六		10			一六五	六七二
八月		九		三六八	九〇		10			一六五	六三二
九月		九		三三三	九〇		六			一〇五	六三八
十月		九七		三三二			二	一七		五八	八二二
十一月		六二		三二五							三一五
十二月		六二		三九三							八〇八

巡回文庫回覽人員調

自八年四月至九年三月

入館人員	新入	一日平均	計
四九,七九四	一六,二三五	一三三,五一	四一,三四六
	九八,九二五	一七一,一一	五三,三八九
一一,四二五	四,三〇〇	三三,二八	一〇,三八六
	二七,〇九七	四〇,三八	一二,六〇〇
		一八八,八三	五八,九二二
		二四四,四三	七五,二六八
六一,二一九		三五四,六六	一一〇,六五三
		四五三,七四	一四一,二五七

雜	兒童	一	趣味	美術	文藝	文藝	語	兵	交	產	醫	工	博	理	數
誌	圖書	童	諸	音	小	學	學	事	信	業	生	學	學	學	學
一七,六四六	一一,一七〇	三三四	五八	四七	四,〇六六	八五三	一六九	七六一	二一七	二二六	一〇七	三六	九五	一八三	三三三
二二,一九六	一六,〇二二	三六八	六一	九二	五,〇三三	九九九	二〇四	八六二	一八	二九九	二九	五一	一一〇	二二七	三八二
三,三四九	二,〇二二	七五	一七	一四	一,五七四	四二二	二一八	二九四	六	六六	四九	一〇	四九	八五	二四八
四,一五九	二,四九八	八七	一八	一七	一,九九一	四七一	一三七	三二二	六	九二	五六	一五	五二	九七	二六〇
二,四〇一	三,四〇五	三〇七	一九六	〇〇〇	一一,〇六五	四,七六四	一,二六六	二,二七三	五六	一,六九三	六四〇	三五三	五三〇	九六二	二,五三三
三,〇七三	四,二二四	三五七	〇〇	〇〇〇	一四,七三三	五,三三三	一,四八四	二,六二〇	五六	二,〇一九	七〇〇	五六九	五七一	一,〇六三	二,八二六
二二,三九六	一七,六六六	七二六	二二二	三六一	一六,七五五	六,〇二八	一,五五五	三,二七八	七九	一,九七五	七九六	三九九	六七四	一,二五〇	三,一〇三
三〇,四二八	二二,七九四	八三三	二八二	四一八	二二,七三六	六,八〇三	一,八二五	三,八二二	八〇	二,四一〇	八八五	六三五	七三三	一,三六七	三,四八八







昭和九年六月廿五日印刷  
昭和九年六月廿五日發行

都城市早鈴町四一六二番地

編輯者兼 富松嘉吉

發行人 熊本市京町木丁六九

印刷人 稻本新吾

印刷所 熊本市京町木丁六九

電話 長二八九番  
四三四三番



278  
215

NO.

PATENTED NO. 119018

"F-M"

**PAMPHLET BINDERS**

are carried in stock in the following sizes

Catalog No.	High	Wide	Thickness
851(菊倍)	30.cm.	x 22.5cm.	x 1cm.
852(四六倍)	26. "	x 18.5 "	x 1 "
853(菊)	22.5 "	x 15. "	x 1 "
854(四六)	18.5 "	x 12.5 "	x 1 "
855(特)	24. "	x 15. "	x 1 "

other sizes are made to order

LIBRARY SUPPLIES OF ALL KINDS

**F. MAMIYA & CO.**

OSAKA - TOKYO - FUKUOKA



終

